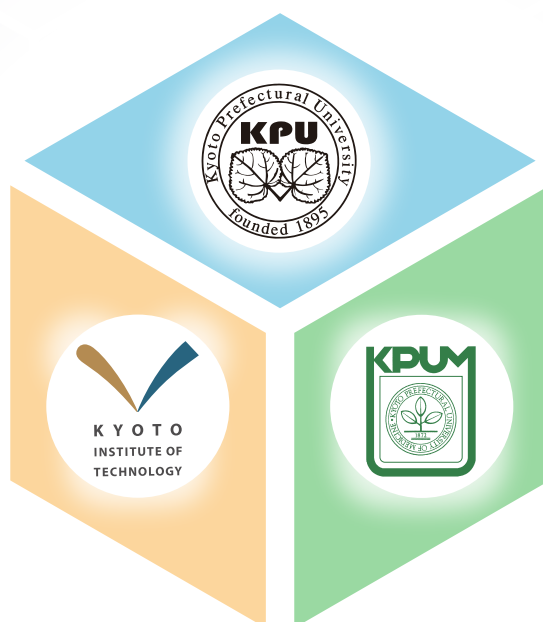


京都三大学教養教育共同化事業

平成 29 年度 報告書



時代が求める新たな教養教育

目 次

ごあいさつ

京都府立大学	学長・副学長あいさつ、大学紹介	3
京都工芸繊維大学	学長・副学長あいさつ、大学紹介	4
京都府立医科大学	学長・副学長あいさつ、大学紹介	5
京都府知事あいさつ		6

第1部 教養教育共同化の展開

(1) 平成29年度取組の到達点（総括コメント）	9
(2) 平成29年三大学教養教育共同化の取組	11
(3) 共同化授業の受講状況	14

第2部 時代が求める新たな教養教育像の探求

(1) 平成29年度のリベラルアーツセンターの活動を総括して	21
(2) 宿泊研修の実施	23
(3) 教育IRセンターからの総合報告－2017年度（平成29年度）－	30

第3部 共同化科目の授業研究

(1) 数学史と教養教育について（科目名：人と自然と数学α）	39
(2) ドイツ映画を用いて、相互の意見の確認と議論の喚起 （科目名：映画で学ぶドイツ語と文化）	41
(3) 課題エッセイ〈読書感想文〉を読む（科目名：文芸創作論）	42
(4) 講義からゼミナールへ、変容の試み （科目名：科学と思想（リベラルアーツ・ゼミナール））	51
(5) 京都銀行との“協働”講義と学生の学び（科目名：京都の経済）	54
(6) 京野菜を栽培する（科目名：京野菜を栽培する）	58
(7) アナログ的観察からアナログ的思考・発想へ（科目名：意外と知らない植物の世界）	60

資料編

文部科学省 大学間連携共同教育推進事業 事後評価調書（抜粋）	65
京都三大学教養教育共同化による「新しい時代の要請に応じた教養教育」の実践	82
平成 29 年度三大学教養教育研究・推進機構 運営委員会 委員名簿	83
三大学教養教育共同化推進体制（平成 24 年度～）	84
教養教育共同化施設「稻盛記念会館」	85
会議の審議状況	86
平成 29 年度京都三大学教養教育共同化科目受講案内（抜粋）	89
京都三大学教養教育研究・推進機構 授業アンケート（様式）	93
京都三大学教養教育研究・推進機構 機構 1 年次生アンケート（様式）	94



京都府立大学

京都府立大学は、1895（明治28年）年に創立された京都府簡易農学校に源を発する創立120年以上の歴史を有する大学です。人文・社会・自然の諸分野にまたがる3学部・3研究科を備えた総合大学であり、教員・学生相互の密度の高いコミュニケーションをベースに、実験、実習、フィールドワークなど質の高い教育を実現しています。また、京都府の知の拠点として、京都地域未来創造センターが中心となり、高度かつ地域社会と密接に連携した研究、府内各地域の様々な課題に応える地域貢献活動や公開講座などを積極的に展開しています。

平成26年度からは、全国初となる京都府立医科大学、京都工芸繊維大学との教養教育共同化がスタートし、教養教育共同化施設「稲盛記念会館」で三大学の学生が一堂に会して学ぶとともに、府民の皆様等との多様な交流が一層促進されています。

現在は、和食文化の保護・継承を担う人材を育成するための高等教育機関として「和食文化学科（仮称）」を平成31年度に開設するべく準備を進めています。



学長あいさつ

京都府立大学学長

築山 崇



学びから、自分自身の変化を感じとる

3大学の共同による新しい教養教育もスタートから4年、文科省の補助事業期間も終わり、日常的な体制へと移行しつつ、より質の高い学びを目指して、本年度も意欲的な展開が図られました。

その中で、28年度から始まった「宿泊研修」が今年度は、府南部の和束町で行われました。参加した学生のみなさんの報告を読ませていただきましたが、参加する前と後での自分自身の「思いの変化」が語られている点が印象的でした。住民のみなさんの「地元愛の強さ」、「年をとっても自分の生きがいを持ち、自分のまちを誇りに思っている姿」への感動は、訪れる前には「大した期待もしていなかった」「低いモチベーションで参加した」という状態からの“変化”としてあり、「実際に訪れないとこの町のよさはわかりません」という実感が伴っていることが重要です。

地域課題を実際に共同で体験し、そこに暮らす人たちに直に触れ学ぶ中で、「自分の好きなことを見つけていこう」という、自身のこれからの生き方に対する構えのようなものが新たに生まれていることが注目されます。学びが、自分自身の生き方に関わる変化につながっている点に、教養教育の神髄に迫る可能性が見えてきます。

副学長あいさつ

京都府立大学副学長
京都三大学教養教育研究・推進機構運営委員長

野口 祐子

京都三大学共同化教養教育の開始から4年が経ち、稲盛記念会館が三大学学生の活気で満ちるのも見慣れた光景になってきました。平成29年度も京都府をはじめ関係各位のご理解とご協力によって共同化事業を拡充して実施できたことに感謝いたします。おかげさまで本事業は大学間連携のモデル事業として文部科学省に取り上げられるまでに成長しました。

平成29年度は共同化を開始した平成26年度との比較で三大学の履修者数は1.3倍、学生が自大学以外の科目を履修する交流率は26.6%から45.7%に増加しました。この間、教室内外での交流も進み、今年度も9月の宿泊研修の他、リベラルアーツ・ゼミナールで共に学んだ学生から次年度実施する講演会の企画が生まれています。このように三大学共同化事業は、自大学だけでは得られない学びの経験と交流の場を学生に提供しています。

今年度は共同化教養教育を月曜日の午前に拡大し、上回生向け科目を新規に開講しました。教養教育の履修を1・2回生で終えるのではなく、専門教育と並行して視野を広げるために学び続けてほしいという願いが込められています。また平成29年4月には稲盛記念会館の隣接地に京都府立京都学・歴彩館がオープンし、三大学学生の利用が進んでいます。今後も本事業は京都北山の地における文化交流・学生交流拠点としての役割を果たしてまいります。



京都工芸繊維大学

京都工芸繊維大学は、明治時代の工業化や伝統産業の近代化に対応するために設立された京都高等工芸学校および京都蚕業講習所に端を発します。時代の進展とともに110余年にわたり発展を遂げながら、伝統文化の源である古都の風土の中で、「知と美と技」を探究する独自の学風を築き上げてきました。この栄光ある歴史に新たな一頁を加えるべく、豊かな人間性にもとづく技術の創造をめざして技を極め、人間の知性と感性の共鳴を求めて知と美の融合をめざし、教育研究の成果を世界に発信しています。

本学の特色としては、ものづくりを基盤とした「人に優しい実学」を目指した個性ある教育研究を行っているところです。



学長あいさつ

京都工芸繊維大学学長

古山 正雄



3大学連携による教養教育の共同化事業を大きく発展させたことには、二つの要素があります。一つは、平成24年度に、文部科学省の大学間連携共同教育推進事業の補助金に採択されたことです。これにより、教養教育の共同カリキュラムを構築する上で、財政的な支援を受けることができました。また、京都3大学教養教育研究推進機構が中心となり、学年暦や受講登録、成績管理の方法など教養教育を共同して実施するにあたって必要となる具体的な事項に関して、3大学で意見交換をすることができました。もう一つは、京セラ株式会社名誉会長の稲盛和夫様より御寄付があり、平成26年9月に教養教育共同化施設の建物が整備されたことであります。これにより、3大学の学生が同じ場所で共に学ぶ環境が整いました。稲盛様は勿論のこととして、ご調整していただきました京都府の山田知事や関係各位にも、感謝の意を表したいと思います。

現代社会は、大量消費社会がもたらした資源の枯渇、地球的規模の環境悪化、経済社会のグローバル化、頻発するテロや増え続ける難民など深刻な諸問題に直面しています。一方、日本国内においても急速に進む少子高齢化、格差の拡大などを背景として、私たちは様々な社会問題を抱えています。

このような状況下において大学は、すべての学生に自らが専攻する専門分野とは別に人文・社会・自然にわたる幅広く普遍的な知を学習させ、倫理観や歴史観、国際的な視野を持たせる責務があります。

このことから本学では、人間形成に必要な教養を涵養し、科学技術と人間性との調和・融合を図ることができる広い視野と感性を備えた高度専門技術者を育成するための教育を実施してきました。今後も地域コミュニティの中核的存在として、様々な課題を解決することができる人材を輩出することが求められており、それに応える教育を実施していきます。

副学長あいさつ

京都工芸繊維大学理事・副学長

京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員

大谷 芳夫

府立2大学と本学が共同して新たな教養教育に取り組もうという試みは、構想から約10年にわたる粘り強い努力の結果、平成26年度から「京都三大学教養教育共同化」事業として結実し、4年が経ちました。他学部の学生と共に教養教育を受けることは総合大学では珍しくありませんが、学生としての根本的なアイデンティティーである「所属大学」の異なる学生が共通の場で学び議論するということは、他では得られない貴重な体験であり、まさに「時代が求める新たな教養」の涵養に資すると確信しています。

当初は、まず着実にこの事業を推進するための組織作りや、授業及び定期試験の実施体制整備など、運営上の基礎固めの作業が中心でしたが、現在では、これまでに得られた様々な経験と知見に基づいて、事業をさらにブラッシュアップするための模索が行われています。今後とも、この事業がさらに大きく発展するよう、引き続き努力したいと思います。



京都府立医科大学

京都府立医科大学は、医学部に医学科と看護学科の二学科を有する公立医科大学であり、1872（明治5）年に開設された京都療病院での医学教育を始まりとする、我が国で最も古い医科大学の一つです。

本学ではこのような歴史と実績によって培われた医学や医療技術を背景に、高い倫理観を持ち、患者の立場に立って考える優れた医療人の養成や多様な学際的研究活動を推進し、高度な医療人材や次代を担う指導的人材を育成しています。

また、京都府民に開かれた大学として、地域医療への理解と関心、使命感を持った医学研究者や医療人を育成するとともに、最先端の研究や診療機器の整備を行うことによって、大学の理念である「世界トップレベルの医療を地域に」の実現を目指し、府民等の健康増進に寄与しています。



学長あいさつ

京都府立医科大学学長

竹中 洋



本学では、単なる医療を施す医師、研究者の育成ではなく、社会に貢献できる指導者としての人材を輩出することこそが使命であると考え、これまで一貫して、幅広い教養と専門に必要な基礎教育と医学教育との連携を重視してきたところです。専門的医学教育は勿論のこと、幅広い教養を身につけることも、患者さんの悩みや痛みがわかる人間性豊かな医療人となるためにもとても大切なことと考えています。

こうした観点から、本学と京都府立大学、そして京都工芸繊維大学の三大学が、それぞれの強みと特徴を生かした教養科目を提供しあう教養教育共同化は、本学の学生にとって、より幅広い教養教育の機会を得られるだけでなく、専攻分野や将来の志望の異なる個性との交流を通じて多角的な視点を養い、多彩な価値観の理解につながる、非常に意義深い取組であると考えております。

本学は、現在、「世界のトップレベルの医学を府民の医療へ」をスローガンとして、教育・研究・診療のそれぞれの面で全国有数の実績を残すとともに、新たに設置の最先端がん治療研究センターなどでの研究や治療などを通じて、地域医療へのさらなる貢献を目指していますが、この三大学教養教育共同化の取組が、次なる本学の飛躍につながる「糧」となることを、大いに期待します。

副学長あいさつ

京都府立医科大学副学長
京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員

奥田 司

文部科学省からの支援を得て平成26年度にはじまった、三大学教養教育共同化事業による教育プログラムも、平成29年度からは京都工芸繊維大学そして京都府立大学と本学からの独自共同予算による運営となりました。入念な事前準備が功を奏し、順風満帆な船出ができたものと考えております。

一般に、専門性の高い単科大学においては、所属する学生はどうしても専門領域の殻の中に閉じこもりがちです。しかしながら本学では、医科単科大学でありながら、三大学教養教育共同化の実施によって、所属学生たちは三大学それぞれの特長ある教養講義科目を幅広く選択受講だけでなく、リベラルアーツゼミナール科目の受講等を通じ、専攻分野や学修目標の異なるさまざまな学生たちと交流することが可能となっています。こうした機会をぜひ生かしていただき、積極的に交流することで豊かな人間性を築き、大きく成長してもらいたいと考えます。

なお、平成29年度における本学からの新規提供事業として、「医学概論」の講義開始を挙げさせていただきます。非医学系の学生を対象に、本学が誇る各専門分野の講師陣が医学の基礎・現状についてわかりやすく紹介するこの講義シリーズは、他所ではあまり例を見ないユニークなものと考えます。本学の紹介も織り込む内容となっていますので、工芸繊維大学、府立大学の学生の皆さんには多数受講いただき、この機会に本学の医学マインドに触れてくださればと希望します。

京都府知事 あいさつ

京都府知事 山田 啓二



今、日本を取り巻く情勢を見ますと、緊迫する国際情勢や加速する少子高齢化、東京一極集中など、旧来の制度や既存の価値観では解決できない様々な数多くの課題に直面しています。

このような状況において、地域の安定と持続的な発展を図るためには、高度な専門家を育てると同時に、人間としていかにあるべきかという倫理や哲学を教える教養教育が必要であり、その総合力、人間力こそが、新たな時代に求められる人材像であると考えます。

京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学の三大学は、教養教育の重要性をいち早く認識し、長年共同化に向けての準備を進めてこられました。平成 24 年度からは、文部科学省の支援のもと、「時代が求める新たな教養教育の京都三大学共同（モデル）推進事業」に取り組み、平成 26 年度に全国で初めて国立大と公立大の教養教育を共同化し、昨年度までの間、各大学の強みと特徴を生かした多彩な科目を提供してこられました。

今年度からは、新たなスキームによる独自の運営として、京都の歴史的、文化的特色が学べる「京都学」や学生同士が共通のテーマで議論する「リベラルアーツ・ゼミナール」、地域住民とふれ合い地域課題の解決策を提示する宿泊研修など、既存の科目をさらに充実されるとともに、新たな科目も追加されるなど、着実に歩みを進めていただいております。大変心強く感じているところです。

京都府といたしましては、趣旨に賛同を得て寄附いただくことにより、平成 26 年 9 月に共同化科目を開講するための施設を整備するとともに、平成 29 年 4 月に同じ敷地内に、府立総合資料館をリニューアルし、京都学の研究と府民の交流拠点として府立大学文学部とも一体となった京都学・歴彩館をオープンさせたところであり、学生の皆さんにも広く御活用いただき、知的探求活動に役立てていただくことを願っています。

また、三大学の学生の皆さんが同じ場所に集う中で、学術だけでなくスポーツ、文化、芸術等の面においても幅広い交流が生まれ、京都北山の地が、文化・環境・学術の交流・発信拠点となるよう、地域活性化にもつなげていきたいと考えています。

三大学や京都三大学教養教育研究・推進機構の皆様には、引き続き、取組の成果を教養教育「京都モデル」として全国に発信いただきますとともに、新しい時代を担う学生が身に付けるべき教養教育カリキュラムに更に磨きをかけられ、変化の激しい社会において活躍できる逞しい人材の輩出に向け、引き続き御尽力いただくことを強く期待しています。

第 1 部

教養教育共同化の展開

(1) 平成 29 年度取組の到達点（総括コメント）

京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員長
京都府立大学 副学長

野口 祐子

平成 29 年度は共同化授業の開始から 4 年目となり、文部科学省の大学間連携共同教育推進事業が 28 年度で終了した後も、本事業の理念である「時代が求める新たな教養教育」を推進すべく、三大学共同で独自の科目や取組を開発・実施した。平成 29 年 5 月末には機構が中心となって事後評価調書をまとめ提出した（本報告書に抜粋を収録）。はじめにも述べたが、京都府をはじめ関係各位からご理解とご協力をいただいたおかげで、本事業は大学間連携のモデル事業として文部科学省に例示されるまでに成長し、補助事業の事後評価では、非常に高い評価を得たことを、まず述べておきたい。

ここでは総括コメントとして、京都三大学教養教育研究・推進機構運営委員長の立場からこの一年間を振り返り、特筆すべき活動を取り上げた後、次期の機構体制のもとで取り組まれるべき今後の展開について述べてみたい。

月曜午前への拡大と高度教養教育の実施

平成 29 年度は、前年度まで月曜日の午後 3 コマで実施してきた共同化授業を月曜午前にも拡大し、三大学の特色を生かした以下の 6 科目を新規に開講した。前期は「フランス語圏の文化とジャポニスム」「映画で学ぶドイツ語と文化」、後期は「京都学・歴彩館ゼミ」「映画で学ぶ英語と文化」を 2 回生あるいは 3 回生以上対象科目として、語学、文化、文献資料の活用を専門外の学生が学べる内容で開講した。また府立大学・工芸繊維大学 2 回生以上対象の「医学概論」は医学を専門としない学生のために京都府立医科大学の医療専門家が開発したリレー講義であり、三大学共同化ならではの取組である。このほか、これまで医大看護学科生対象の授業であった「環境論」を共同

化科目に位置づけた。

三大学の特色を生かした科目の開発

三大学共同化教養教育の実施においては、三大学が提供科目を持ち寄るだけではなく、リベラルアーツ・センターが中心となって、学生に学ばせたい科目を新たに開発してきた。平成 29 年度の機構運営委員会において、今後は特に三大学の特色を生かした科目とリベラルアーツ・ゼミナールを充実させていく方向性を確認した。

リベラルアーツ・ゼミナールは少人数クラスで三大学の学生が一つのテーマに取り組み、ディスカッションや発表を行うといった、アクティブ・ラーニングで交流を深める科目群であり、充実の方針に沿って、平成 29 年度は新たに前掲の「京都学・歴彩館ゼミ」の他に「京野菜を栽培する」「科学と思想」を開講した。「科学と思想」は共同化の趣旨に沿って講義形式からゼミ形式に変更して開講するものであり、「京野菜を栽培する」は、受講生が実際に種まきから収穫までを体験しながら、地域の環境・経済・食文化まで視野に入れて考える力を育成する。

このように本事業は授業担当者にも、学生間の交流機会を設ける工夫をするといった変化を促し、教授方法の改善にも結びついている。

平成 30 年度は機構運営委員会の方針に沿った 3 科目を新規開講予定である。三大学の特色を生かしたリレー講義「京都の防災と府民」の科目開発の趣旨と概要については、後述の石田リベラルアーツ・センター長の報告を参照いただきたい。リベラルアーツ・ゼミナールは「レーザで測る、創る、楽しむ」を新規開講し、日常に活用されている最新の科学技術をテーマに、文系・理系間わ

ず参加を促す。また平成 29 年 1 月に開催した運営協議会でいただいた助言を基に、三大学の学生が社会に出る前に身につけておいてほしい社会と法律への意識を醸成する「法学」を開講する。

三大学の学生交流の展開

今年度も昨年度に引き続き、9 月に 1 泊 2 日で合宿研修を実施した。学生にとっていかに貴重な体験となったかは、企画と実施の中心となった石田リベラルアーツ・センター長と播磨特任教授の報告に詳しい。町長の堀忠雄氏をはじめ町ぐるみで学生と交流してくださった和束町の皆様、全面的に企画に関わってくださった京都府と和束町役場職員の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

宿泊研修は準備と実施に多大な時間と人とエネルギーがかかり、学生にとっては単位にもならないが、本報告書冒頭の築山京都府立大学学長の挨拶文にもある通り、学生の変化を促す触媒的な効果を実感できる取組であり、今後も実施したい。

今年度のもう一つ特筆すべき学生間交流は、長坂勉非常勤講師担当のリベラルアーツ・ゼミナール「現代社会と映画製作」の履修者が中心となって企画し、来年度開催を予定している三大学学生対象の講演会である。この企画は平成 29 年度京都府公立大学法人学生地域活動支援事業に採択され、講演会の広報の一環として、現代社会の問題に目を向ける映画の鑑賞会を実施するなど、三大学の学生が活発に活動している。

質保証の取組

三大学共同化教養教育は、各大学が単独ではなし得なかった新たな教養教育を生み出す取組であ

り、三大学の教員が個々に、これまで通りの授業を行っているだけでは新たな化学反応は期待できない。そのため本事業の立ち上げから教育 IR センターを中心に、共同化授業の質保証に取り組んできた。今年度も引き続き、授業評価アンケートによる学生の学びへの態度と教育目標の達成度の測定、1 年次生アンケートによる満足度調査を取組の改善へと結びつける活動、および教員アンケートと科目担当者会議による、共同化教養教育の課題の把握と授業改善に取り組んだ。今年度の取組の詳細については、萩原教育 IR センター長の報告をご覧ください。

共同化授業の今後について

平成 30 年度からは機構運営委員会の構成員が若干入れ替わる予定であり、新たな体制のもと、引き続き「時代が求める新たな教養教育の構築」という理念を追求していただきたい。そのためには継続性ととともに、事業の検証と新規取組を視野に入れた活動が期待される。

平成 26 年度から実施してきた共同化授業については、29 年度は 80 科目を開講し、選択幅の拡大という点からは 4 年間でおおいに充実させることができた。今後は三大学の特色を生かした科目や少人数ゼミの開発と共に、科目の開講時間割の精査と整理を行うべき時期に来ている。新規科目の開発にあたっては、京都府立大学教養教育センター主催の学生ワークショップで出た「学びたい新規科目を学生が提案できる機会がほしい」という意見を参考に、学生からの提案の機会を設けることも一案であろう。

本事業は継続性と質の担保が今後も重要となることは言を俟たない。

(2) 平成 29 年度三大学教養教育共同化の取組

共同化教養教育等の概要

京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学の京都三大学による共同化授業が平成 26 年 4 月に始められ、今年度で 4 年目を迎える。これまでは、文部科学省の大学間連携共同教育推進事業補助金を受けて事業の構築を図ってきたが、5 年間の助成も終了し、今年度からは、事業費を三大学で相互に負担しながらの独自事業として取り組んだ。

三大学での共同化教養教育は、個々には規模が小さく、各大学で提供できる科目に限りがあるため、各大学の強みと特徴を生かした教養科目を相互に提供し、提供されたすべての科目を各大学が自大学の科目とすることによって、学生の科目選択の幅を大きく増やし、学修意欲を高めようとするものである。

文系、理工系、医学系の専門分野や将来の志望が異なる三大学の学生が授業で混在し、多様な視点や価値観を持つ学生と一緒に学び交流することを通じ、豊かな人間性の形成に資することもねらいとしている。平成 26 年夏に、京都府立大学下鴨キャンパス内に教養教育共同化施設「稲盛記念会館」が整備され、同年後期授業からは同施設が教養教育の拠点となり、学生間交流に大きく寄与してきている。

今年度も三大学で協議の上、共通の学年暦を定め、前期は 4 月 10 日（月）から 7 月 31 日（月）（試験日を含む）、後期は 10 月 2 日（月）から 2 月 5 日（月）（試験日を含む）とした。

また、これまで、毎週月曜日午後の 3～5 コースに集中して開講していた共同化授業を、今年度からは、月曜日午前にも、上回生対象科目を中心に 6 科目開講することとした。

このほか、例年取り組んでいる集中講義を、夏期と冬期休業期間中を中心に 8 科目開講した。

三大学教養教育共同化が展開される以前から三大学間で実施されていた単位互換制度については、三大学合わせて 38 科目とし、これまで希望受付は 4 月の 1 回のみであったものを、今年度からは前期と後期、それぞれの時期に受け付けることとし、学生の登録時における利便や登録機会の拡大を図ることとした。

これら、共同化授業と単位互換の両制度が相俟って、それぞれが十分に機能を発揮することで、三大学教養教育共同化事業が一層充実・発展するように取り組んだ。

平成 29 年度共同化カリキュラムの概要

平成 29 年度は、共同化科目として 80 科目を開講した。昨年度に比べると 6 科目の増、共同化開始年度である平成 26 年度とでは 12 科目増加したこととなる。科目群別では、「人間と文化」29 科目、「人間と社会」26 科目、「人間と自然」25 科目と、諸分野をバランスよく提供することに努めた。

80 科目を提供大学別にみると、京都工芸繊維大学が 31 科目、京都府立大学が 24 科目、京都府立医科大学が 12 科目、機構が 13 科目となる。

この結果、共同化開始前に比べ学生の科目選択幅は、各大学により異なるものの、2.3 倍～5.2 倍に大きく拡大した。

共同化事業開始当初から取り組んでいる『京都学』科目は、15 科目開講した。昨年度より 3 科目増やし、三大学の教員によるリレー形式での授業「近代京都と三大学」など機構提供科目を 3

科目開講したほか、京都工芸繊維大学が 2 科目、京都府立大学が 9 科目、京都府立医科大学が 1 科目担当し、各大学の専門性を生かした多様な『京都学』科目を提供した。

また、少人数で学生同士が交流し、共通のテーマで対話し議論する力を育むことをねらいとした「リベラルアーツ・ゼミナール」を、昨年度より 2 科目増やし、11 科目開講した。考え方や学び方の基礎力を培う授業やグローバルな視野を広げる集中講義、アクティブラーニングを取り入れたゼミナールなど、多彩な内容を提供している。

学び続ける教養教育の一環で、平成 27 年度から取り組んでいる上回生を対象とした高度教養教育科目については、「医学概論」など三大学からそれぞれ専門的な科目を提供しあうことで、昨年度より 5 科目増の 8 科目に充実させた。

グローバル化が進展する中、語学・異文化理解科目についても力点を置き、「フランス語圏の文化とジャポニスム」など昨年度より 3 科目増やし 5 科目を開講した。

更には、教養教育共同化施設に隣接する京都府立植物園と連携した「意外と知らない植物の世界」などフィールドワークを取り入れた科目も 4 科目開講したほか、隣接の京都府立京都学・歴彩館を会場に、同館の所蔵資料を活用したリベラルアーツ・ゼミナールも開講した。

このほか、地元企業との連携事業として、地域金融機関である京都銀行職員を毎回ゲストスピーカーに迎えた「京都の経済」や京都市内の圃場に出向き、実際に野菜栽培に取り組む「京野菜を栽培する」など、これまでにない多彩な科目展開を図った。

平成29年度 共同化科目一覧

科目群		科目名	担当教員	開講期	授業目的区分		
					A	B	C
人間と文化 (29科目)	人間と歴史	哲学	工・伊藤	後	○	○	
		比較宗教学	工・長岡	前	○	○	
		宗教と文化	医・田中	後	○	○	
		日本史	工・鬼頭	前	○	○	
		東西文化交流史	工・カサノ	前	○	○	○
		アジアの歴史と文化	府・井上	前	○	○	
	文化・芸術	ヨーロッパの歴史と文化	府・阿部ほか	後	○	○	
		ラテン語	医・松本	後	○	○	
		西洋文化論	工・山下太	後	○	○	○
		日本文学Ⅰ	医・早川	前	○	○	
		日本文学Ⅱ	医・早川	後	○	○	
		日本近現代文学	工・高木	前	○	○	
		西洋文学論	工・山下太	前	○	○	
		文芸創作論	医・藤田	後	○	○	
		美と芸術	工・三木順	前	○	○	
		日本近代精神史	工・伊藤	前	○	○	
	京都学	フランス語圏の文化とジャポニスム(※2回生以上)	工・吉川	前(午前)	○	○	
		映画で学ぶ英語と文化(※3回生以上)	府・出口	後(午前)	○	○	
		映画で学ぶドイツ語と文化(※3回生以上)	府・青地	前(午前)	○	○	
		京都の歴史Ⅰ	府・菱田ほか	前	○	○	
		京都の歴史Ⅱ	府・小林ほか	後	○	○	
		京都の文学Ⅰ	府・赤瀬	前	○	○	
	リベラルアーツ・ゼミナール	京都の文学Ⅱ	府・赤瀬	後	○	○	
		京の意匠	工・並木	後	○	○	○
		英語で京都(※3回生以上)	機構・金澤	後	○	○	○
		京都学・歴史ゼミ(リベラルアーツ・ゼミナールⅠ)(※2回生以上)	機構・藤本ほか	後(午前)	○	○	
		現代イスタンブール世界の文化と社会(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(※2回生以上)	機構・田村	集中・夏	○	○	
		感性の実践哲学(リベラルアーツ・ゼミナールⅢ)(※2回生以上)	機構・桑子	集中・夏	○	○	
人間と社会 (26科目)	社会科学の基礎	科学と思想(リベラルアーツ・ゼミナールⅣ)(※2回生以上)	工・林	後	○	○	
		京都学・歴史ゼミ(リベラルアーツ・ゼミナールⅤ)(※2回生以上)(再掲)	機構・藤本ほか	後(午前)	○	○	
		人文地理学Ⅰ	医・阿部ほか	前	○	○	
		人文地理学Ⅱ	医・春日	後	○	○	
		社会学Ⅰ	府・井口	前	○	○	○
		社会学Ⅱ	府・井口	後	○	○	○
	人間と社会	政治学	工・竹本	後	○	○	○
		国際政治	府・依田	前	○	○	○
		経済学入門	工・人見	後	○	○	○
		生活と経済	府・小沢	後	○	○	○
		心理学	工・大谷	前	○	○	○
		発達心理学	医・小川	集中・夏	○	○	○
	京都学	現代社会と心	府・石田	後	○	○	○
		現代社会とジェンダー	府・小沢ほか	前	○	○	○
		人権教育	工・杉本	前	○	○	○
		現代教育論	工・垣屋	前	○	○	○
		食環境をめぐる国際社会と日本	府・宗田ほか	前	○	○	○
		環境と法	工・鳥谷部	後	○	○	○
	リベラルアーツ・ゼミナール	近代京都と三大学	機構・宗田ほか	前	○	○	○
		京の産業技術史	工・山田	後	○	○	○
		現代京都論	府・大島	前	○	○	○
		医史学	府・川勝	後	○	○	○
		京都の経済	府・川勝	後	○	○	○
		現代社会に学ぶ関心(リベラルアーツ・ゼミナールⅥ)(※2回生以上)	機構・児玉	前・後	○	○	
人間と自然 (26科目)	社会科学の基礎	社会科学的学び方(リベラルアーツ・ゼミナールⅦ)(※2回生以上)	機構・児玉	後	○	○	
		現代社会と映画製作(リベラルアーツ・ゼミナールⅧ)(※2回生以上)	機構・長坂	集中・夏	○	○	
		アメリカと中国はいま(リベラルアーツ・ゼミナールⅨ)(※2回生以上)	機構・脇田	集中・冬	○	○	
		経営哲学(リベラルアーツ・ゼミナールⅩ)(※2回生以上)	機構・児玉	前	○	○	
		物理Ⅰ	府・春山	前	○	○	
		化学概論Ⅰ	工・三木定	後	○	○	
	自然科学の基礎	化学概論Ⅱ	工・石川	後	○	○	
		生物学概論Ⅰ	工・足田	前	○	○	
		生物学概論Ⅱ	工・足田	後	○	○	
		生命科学講話	府・塚本ほか	集中・夏	○	○	
	地球の科学	地球の科学	工・酒井	後	○	○	

科 目 群		科 目 名	担当教員	開講期	授業目的区分		
					A	B	C
人間と自然 (26科目)	人間と自然・科学	人と自然と数学α	工・峯	前	○	○	○
		人と自然と数学β	工・朝田	後	○	○	○
		人と自然と物理学	工・萩原ほか	後	○	○	○
		生物学的人間学	医・小野ほか	前	○	○	○
		意外と知らない植物の世界	機構・松谷ほか	後	○	○	○
		科学史	工・大西	後	○	○	○
	京都学	環境問題と持続可能な社会	工・山田	前	○	○	○
		食と健康の科学	府・東ほか	前	○	○	○
		キャンパスヘルス概論	工・荒井	前	○	○	○
		健康生物特論(※3回生以上)(修士課程大学院生を含む。)	医・八木田	集中・夏	○	○	○
		エネルギー科学	工・林	前	○	○	○
		現代科学と倫理	府・岩崎	前	○	○	○
	リベラルアーツ・ゼミナール	医学概論(※2回生以上の工・大生が対象)	医・渡邊ほか	後(午前)	○	○	○
		環境論	機構・田中	後(午前)	○	○	○
		京都の自然と森林	府・高原ほか	前	○	○	○
		京都の農林業	府・寺林ほか	後	○	○	○
		京野菜を栽培する(リベラルアーツ・ゼミナールⅪ)	府・岡藤	集中	○	○	○
		製法の機能から科学を学ぶ(リベラルアーツ・ゼミナールⅫ)(リベラルアーツ・ゼミナールⅬ)	機構・石田	後	○	○	○
合計80科目							
リベラルアーツ・ゼミナール (11科目)	(再掲)	京都学・歴史ゼミ(リベラルアーツ・ゼミナールⅭ)(※2回生以上)	機構・藤本ほか	後(午前)	○	○	○
		科学と思想(リベラルアーツ・ゼミナールⅮ)(旧科学と思想)	工・林	後	○	○	○
		現代社会に学ぶ関心(リベラルアーツ・ゼミナールⅯ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅠ)	機構・児玉	前・後	○	○	○
		社会科学の学び方(リベラルアーツ・ゼミナールⅯⅠ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)	機構・児玉	後	○	○	○
		経営哲学(リベラルアーツ・ゼミナールⅯⅡ)(※2回生以上)	機構・児玉	前	○	○	○
		製品の機能から科学を学ぶ(リベラルアーツ・ゼミナールⅯⅢ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅢ)	機構・石田	後	○	○	○
	集中開講	現代イスタンブール世界の文化と社会(リベラルアーツ・ゼミナールⅯⅣ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅣ)	機構・田村	集中・夏	○	○	○
		感性の実践哲学(リベラルアーツ・ゼミナールⅯⅤ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅣ)	機構・桑子	集中・夏	○	○	○
		現代社会と映画製作(リベラルアーツ・ゼミナールⅯⅥ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅤ)	機構・長坂	集中・夏	○	○	○
		アメリカと中国はいま(リベラルアーツ・ゼミナールⅯⅦ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅥ)	機構・脇田	集中・冬	○	○	○
		京野菜を栽培する(リベラルアーツ・ゼミナールⅯⅧ)	府・岡藤	集中	○	○	○
京 都 学 (15科目)	(再掲)	京都の歴史Ⅰ	府・菱田ほか	前	○	○	○
		京都の歴史Ⅱ	府・小林ほか	後	○	○	○
		京都の文学Ⅰ	府・赤瀬	前	○	○	○
		京都の文学Ⅱ	府・赤瀬	後	○	○	○
		京の意匠	工・並木	後	○	○	○
		英語で京都(※3回生以上)	機構・金澤	後	○	○	○
	京都学	京都学・歴史ゼミ(リベラルアーツ・ゼミナールⅯⅨ)(※2回生以上)	機構・藤本ほか	後(午前)	○	○	○
		近代京都と三大学	機構・宗田ほか	前	○	○	○
		京の産業技術史	工・山田	後	○	○	○
		現代京都論	府・大島	前	○	○	○
		医史学	医・八木	前	○	○	○
		京都の経済	府・川勝	後	○	○	○
2回生以上向け開講 (8科目)	京都の自然と森林	府・高原ほか	前	○	○	○	
	京都の農林業	府・寺林ほか	後	○	○	○	
	京野菜を栽培する(リベラルアーツ・ゼミナールⅯⅩ)	府・岡藤	集中	○	○	○	
2回生以上向け開講 (8科目)	(再掲)	フランス語圏の文化とジャポニスム(※2回生以上)	工・吉川	前(午前)	○	○	○
		映画で学ぶ英語と文化(※3回生以上)	府・出口	後(午前)	○	○	○
		映画で学ぶドイツ語と文化(※3回生以上)	府・青地	前(午前)	○	○	○
		英語で京都(※3回生以上)	機構・金澤	後	○	○	○
		京都学・歴史ゼミ(リベラルアーツ・ゼミナールⅯⅪ)(※2回生以上)	機構・藤本ほか	後(午前)	○	○	○
		経営哲学(リベラルアーツ・ゼミナールⅯⅫ)(※2回生以上)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅤ)	機構・児玉	前	○	○	○
	2回生以上向け開講 (8科目)	健康生物特論(※3回生以上)(修士課程大学院生を含む。)	医・八木田	集中・夏	○	○	○
		医学概論(※2回生以上の工・大生が対象)	医・渡邊ほか	後(午前)	○	○	○

担当教員（それぞれの略称は、科目の提供大学・機関を示します。）

工：京都工芸繊維大学、府：京都府立大学、医：京都府立医科大学、

機構：京都三大学教養教育研究・推進機構

授業目的区分（○は該当するもの、◎は特に強調するもの）

A：人文・社会・自然の諸分野の学術体系を俯瞰しながらこれらの基礎を幅広く学習し、学術への高い関心を育てる。

B：世界の人々の多様な生き方を感じ、人としての豊かな感性や倫理観を拡張する。

C：日々社会に生起する種々の問題において、真理や正義を探究する議論に習熟する。

(3) 共同化授業の受講状況

履修登録の状況

平成 29 年度前期の共同化科目は 43 科目で、提供大学別内訳は、京都工芸繊維大学が 16 科目、京都府立大学が 15 科目、京都府立医科大学が 6 科目、機構が 6 科目である。また、43 科目中、6 科目は夏期集中講義科目として開講し、1 科目は 8 月～12 月にかけて開講した。

学生の履修登録の状況は、別表「三大学教養教育共同化科目の履修登録者（平成 29 年度前期）」のとおりである。履修登録者総数が 4,862 人で、大学別では、京都工芸繊維大学が 2,331 人、京都府立大学が 1,942 人、京都府立医科大学が 589 人である。三大学学生の交流状況を示す自大学以外の科目を履修登録した学生（機構提供科目履修者を除く）は 2,109 人であり、履修登録者総数（機構提供科目履修者を除く）4,648 人に占める割合は 45.4%であった。

次に、後期の共同化科目は 38 科目で、提供大学別内訳は、京都工芸繊維大学が 15 科目、京都府立大学が 9 科目、京都府立医科大学が 6 科目、機構から 7 科目（前期と同内容のリベラルアーツ・ゼミナール 1 科目を含む）である。また、38 科目中 1 科目は、冬期集中講義科目として開講した。

学生の履修登録の状況は、別表「三大学教養教育共同化科目の履修登録者（平成 29 年度後期）」のとおりである。履修登録者総数が 2,841 人で、大学別では、京都工芸繊維大学が 1,309 人、京都府立大学が 1,426 人、京都府立医科大学が 106 人である。三大学学生の交流状況を示す自大学以外の科目を履修登録した学生（機構提供科目履修者を除く）は 1,188 人であり、履修登録者総数（機構提供科目履修者を除く）2,565 人に占める割合は 46.3%であった。

これらの結果、前期と後期を合わせた通年での履修者総数は 7,703 人で、前年度に比べ 446 人増加（+6.1%）した。また、事業開始年度である平成 26 年度に比べると、1,807 人、伸び率で 30.6%の増加をみた。

大学別では、京都工芸繊維大学が対前年度 165 人増加（+4.7%）。京都府立大学が 225 人増加（+7.2%）。京都府立医科大学が 56 人増加（+8.8%）という結果であった。

履修定員調整

教養教育共同化施設の整備に当たっては、マスプロ教育を避けるために教室規模を最大 200 人程度とされたこともあり、科目ごとにあらかじめ履修定員を設定の上、授業を実施している。そのため、各科目において大学ごとに定数の配分を行うこととなるが、配分に当たっては、まずは、科目定員の半数を科目提供大学が、残りの半数をその他 2 校で 1 年生の学年定員数に応じ配分することを原則としている。

その上で、学生の履修希望を受け付け、科目ごとに各大学の履修希望数を集約し、定員に余剰が生じた大学があった場合には、その余剰分を再配分するなどの工夫を行うことにより、可能な限り学生の履修希望にかなった定員配分となるように調整を行っている。

学生への受講ガイダンス

共同化授業の取組について、受講する学生にわかりやすく周知を図る必要があるため、三大学共通のガイダンス冊子「京都三大学教養教育共同化科目受講案内」（資料編参照）を作成した。

冊子には、この1冊があればスムーズに共同化授業が受講できるよう、共同化の理念・目的をはじめ、共同化科目の履修方法、共同化科目一覧、前・後期ごとの各科目の履修定員、科目概要、開講時間割などを掲載した。科目概要には、科目の説明だけでなく、当該科目担当教員の授業に対する姿勢や思いを学生へのメッセージとして、授業目的区分とともに掲載した。

また、今年度は、上回生対象の共同化科目を8科目に拡大したこともあり、上回生対象科目のみを紹介したチラシを新たに作成の上、周知徹底を図るとともに、三大学教養教育共同化単位互換制度について、より一層の活用が図られるよう、冊子にまとめた「単位互換履修ガイド」を昨年度同様に作成し、配布した。

学生への受講ガイダンスは、各大学で実施される新入生履修ガイダンス時に、共同化科目に関して説明する時間枠をそれぞれ設け、関連冊子の配布と説明を行った。

(3) 共同化授業の受講状況

三大学教養教育共同化科目の履修登録者（平成 29 年度前期）

提供大学	開講コース	科目名	履修者数				交流率
			工織大	府大	医大	合計	
工織大	月 2	(新) フランス語圏の文化とジャポニスム (※ 2 回生以上)	2	14	0	16	87.5%
府大	月 2	(新) 映画で学ぶドイツ語と文化 (※ 3 回生以上)	4	6	0	10	40.0%
工織大	月 3	日本近代精神史	54	26	3	83	34.9%
工織大	月 3	現代教育論	147	28	20	195	24.6%
工織大	月 3	生物学概論 I	45	67	2	114	60.5%
工織大	月 3	環境問題と持続可能な社会	74	15	0	89	16.9%
府大	月 3	京都の歴史 I	95	167	26	288	42.0%
府大	月 3	国際政治	13	23	1	37	37.8%
府大	月 3	現代京都論	77	102	25	204	50.0%
府大	月 3	物理学 I	111	38	2	151	74.8%
府大	月 3	社会学 I	16	62	1	79	21.5%
医大	月 3	医史学	8	3	105	116	9.5%
機構	月 3	現代社会に学ぶ問う力・書く力 a (リベラルアーツ・ゼミナール)	16	9	5	30	-
工織大	月 4	日本近現代文学	45	48	2	95	52.6%
工織大	月 4	美と芸術	138	30	3	171	19.3%
工織大	月 4	化学概論 I	54	14	3	71	23.9%
工織大	月 4	人と自然と数学 a	95	14	2	111	14.4%
工織大	月 4	キャンパスヘルス概論	54	144	5	203	73.4%
府大	月 4	京都の文学 I	19	99	2	120	17.5%
府大	月 4	食と健康の科学	114	45	11	170	73.5%
医大	月 4	日本文学 I	14	20	4	38	89.5%
医大	月 4	人文地理学 I	68	33	93	194	52.1%
医大	月 4	生物学的人間学	26	26	61	113	46.0%
機構	月 4	近代京都と三大学	40	52	0	92	-
工織大	月 5	比較宗教学	108	57	7	172	37.2%
工織大	月 5	日本史	58	39	1	98	40.8%
工織大	月 5	西洋文学論	14	16	0	30	53.3%
工織大	月 5	心理学	121	54	14	189	36.0%
工織大	月 5	エネルギー科学	60	19	1	80	25.0%
工織大	月 5	人権教育	4	13	2	19	78.9%
府大	月 5	アジアの歴史と文化	29	67	1	97	30.9%
府大	月 5	現代社会とジェンダー	39	68	11	118	42.4%
府大	月 5	食環境をめぐる国際社会と日本	44	43	10	97	55.7%
府大	月 5	京都の自然と森林	65	90	17	172	47.7%
府大	月 5	現代科学と倫理	18	6	0	24	75.0%
機構	月 5	経営哲学 (リベラルアーツ・ゼミナール) (※ 2 回生以上)	1	4	0	5	-
府大	集中	生命科学講話	312	290	44	646	55.1%
医大	集中	発達心理学	57	36	78	171	54.4%
医大	集中	時間生物学特論 (※ 3 回生以上 (修士課程大学院生を含む))	26	4	7	37	81.1%
機構	集中	現代社会と映画製作 (リベラルアーツ・ゼミナール)	10	14	5	29	-
機構	集中	現代イスラーム世界の文化と社会 (リベラルアーツ・ゼミナール)	12	15	3	30	-
機構	集中	感性の実践哲学 (リベラルアーツ・ゼミナール)	10	10	8	28	-
府大	集中	(新) 京野菜を栽培する (リベラルアーツ・ゼミナール)	14	12	4	30	60.0%
		合 計	2,331	1,942	589	4,862	45.4%

(注) 交流率：科目提供大学以外の大学の履修者数をその科目の全履修者数で割った値。

(3) 共同化授業の受講状況

三大学教養教育共同化科目の履修登録者（平成 29 年度後期）

提供大学	開講コース	科目名	履修者数				交流率
			工織大	府大	医大	合計	
医大	月 1	(新) 医学概論（※ 2 回生以上の工織大・府大生）	19	13	-	32	100.0%
府大	月 2	(新) 映画で学ぶ英語と文化（※ 3 回生以上）	9	16	0	25	38.5%
機構	月 2	(新) 環境論	72	54	0	126	-
機構	月 2	(新) 京都学・歴史館ゼミ（リベラルアーツ・ゼミナール） （2 回生以上）	4	9	0	13	-
工織大	月 3	哲学	46	25	4	75	37.7%
工織大	月 3	東西文化交流史	95	32	6	133	26.4%
工織大	月 3	京の意匠	23	8	3	34	26.2%
工織大	月 3	政治学	11	22	5	38	71.1%
工織大	月 3	科学史	35	9	1	45	20.4%
工織大	月 3	生物学概論Ⅱ	40	43	1	84	55.7%
府大	月 3	京都の歴史Ⅱ	78	149	3	230	37.1%
府大	月 3	(新) 京都の経済	27	34	6	67	50.7%
府大	月 3	社会学Ⅱ	12	99	0	111	8.3%
医大	月 3	文芸創作論	7	15	4	26	85.7%
機構	月 3	社会科学の学び方（リベラルアーツ・ゼミナール）	6	1	4	11	-
機構	月 3	製品の機能から科学を学ぶ （リベラルアーツ・ゼミナール）	17	11	1	29	-
機構	月 3	意外と知らない植物の世界	17	17	16	50	-
工織大	月 4	科学と思想（リベラルアーツ・ゼミナール）	15	1	1	17	14.3%
工織大	月 4	環境と法	45	51	1	97	55.3%
工織大	月 4	人と自然と数学β	16	1	1	18	9.5%
工織大	月 4	人と自然と物理学	22	6	0	28	20.0%
府大	月 4	ヨーロッパの歴史と文化	81	90	1	172	48.3%
府大	月 4	京都の文学Ⅱ	34	82	0	116	29.9%
府大	月 4	現代社会と心	71	105	16	192	46.2%
医大	月 4	宗教と文化	24	32	1	57	98.2%
医大	月 4	ラテン語	68	67	6	141	95.9%
医大	月 4	日本文学Ⅱ	20	18	0	38	100.0%
医大	月 4	人文地理学Ⅱ	18	13	10	41	78.3%
工織大	月 5	西洋文化論	105	63	0	168	38.0%
工織大	月 5	経済学入門	20	37	4	61	65.1%
工織大	月 5	京の産業技術史	27	28	0	55	50.9%
工織大	月 5	化学概論Ⅱ	8	6	0	14	33.3%
工織大	月 5	地球の科学	95	77	1	173	45.1%
府大	月 5	生活と経済	13	68	0	81	18.1%
府大	月 5	京都の農林業	86	110	0	196	43.9%
機構	月 5	現代社会に学ぶ問う力・書く力 b （リベラルアーツ・ゼミナール）	6	3	0	9	-
機構	月 5	英語で京都（※ 3 回生以上）	7	1	0	8	-
機構	集中	アメリカと中国はいま（リベラルアーツ・ゼミナール）	10	10	10	30	-
		合 計	1,309	1,426	106	2,841	46.3%

（注）交流率：科目提供大学以外の大学の履修者数をその科目の全履修者数で割った値。

第 2 部

時代が求める新たな教養教育像の探求

(1) 平成 29 年度のリベラルアーツセンターの活動を総括して

京都三大学教養教育研究・推進機構 リベラルアーツセンター長／京都府立大学 教授

石田 昭人

本年度は文科省事業後の独自運営初年度であり、センターとしては一連の定常業務のほか、昨年度試行して好評であった宿泊研修の実施、ガイダンスの改善、新規科目の設計などの活動を行った。

本年度の活動項目を列挙すると次のようになる。

1) 30 年度カリキュラムの編成

・新規授業科目「京都の防災と府民」の企画・設計

2) 教育 IR センターとの連携

・科目担当者会議の開催

3) 学生主体の探求活動支援

・宿泊研修の実施

4) ガイダンスの実施

5) FAQ の作成

詳細が別記される事項もあるが、各取組について以下に概説する。

1) 30 年度カリキュラムの編成

・新規授業科目の企画・設計

三大学のこれまでの取組によって、既に十分な種類と数の講義を提供できるようになったが、少しずつ内容の洗練や改編を行っていく必要があり、また、社会的な要請に応えることも求められる。そこで、本年度は「防災」をキーワードに、新たな科目の企画・設計を行うことにした。一口に防災と言っても非常に範囲が広いが、三大学の特徴を活かせば、治山治水や建築・構造物のようなハード面はもちろん、救命救急、避難所における支援や、行政機関における対応といったソフト面まで、それぞれを専門とする教員が、防災に関する知識や意識を未だ持ち合わせていないと考えられる三大学の学生達に貴重な学びを提供できるのではないかと期待された。そこで、センターから三大学にそれぞれ照会し、担当してもらえる教員を募ったうえで科目を設計した。事前の照会にあたってはセンター長の私と播磨特任教授が担当した

が、科目の設計にあたっては府立大学公共政策学部公共政策学科の松岡京美准教授に全面的にお世話になった。三大学の共同化科目として相応しい特徴ある科目が構成できたと自負している。講師の陣容と概要は以下の通りである。

1. 京都の防災と京都府民 石田（三大学）・松岡（府立大公共）
 2. 震災からの復興とその検証 檜谷（府立大環境デザイン）
 3. 都市の災害史 1 岩本（工繊大）
 4. 都市の災害史 2 岩本（工繊大）
 5. 日本の復興・減災の災害対応策 松岡（府立大公共）
 6. 災害情報と行政の対応策への人々の意識 村山（立命館大学政策科学）
 7. 災害看護論 1（災害時の医療と看護） 滝下（府立医大看護）
 8. 災害看護論 2（災害時の健康・生活支援） 滝下（府立医大看護）
 9. 木造建築と防災 1 田淵（府立大環境デザイン）
 10. 木造建築と防災 2 田淵（府立大環境デザイン）
 11. 原発災害の住民避難政策 村山（立命館大学政策科学）
 12. 自主防災計画の策定 三好（府立大森林）
 13. 京都の治山・治水と災害文化 三好（府立大森林）
 14. 災害の広域対応としての公務員派遣やボランティア 松岡（府立大公共）
 15. 総括と学生からのフィードバック 石田、播磨（三大学）
- このように、多彩かつ深い内容となっている。

2) 教育 IR センターとの連携

・科目担当者会議の開催

今年度も教育 IR センターとの共催で科目担当

者会議を実施した。詳細は別項を参照されたい。

3) 学生主体の探求活動支援

・宿泊研修の実施

詳細は別項に譲るが、簡単に触れておく。昨年度は綾部市において実施したが、学生達にはかけがえのない体験となったようで、非常に好評であった。そこで、今年度も実施の方向で努力した結果、三大学の理解が得られて実現することができた。今年度は京都府の重要特産品である「お茶」に着目し、和束町で実施することにした。京阪奈学園都市の近傍に存在する和束町は碾茶の産地として名高く、極めて美しい風景はあるものの、完全農業依存といって過言ではないために町長以下、強い危機感を抱きつつ、観光を始めとする振興策の立案や実施に執心してきた。全面的な協力を頂けたのはそういう背景事情もある。茶畑や加工場、民宿の見学と現地の人達の交流、とくに、苦労話とともに、大きな喜びを語っていただけたことに、学生達は心を強く動かされたようであった。

夜の検討会では町長以下、町役場のスタッフの皆さんを交えてそれぞれのグループで熱い議論が交わされ、学生達はそれをもとに、深夜まで提案内容の立案・洗練と発表の準備に勤しんだ。翌日の提案発表会には町のスタッフとともに地域住民の皆さんも参加して下さり、中には非常に具体性や実現性の高いものも見受けられ、学生達にとっては貴重な体験となったと思われる。

昨年度同様、わずか2日間であるが、学生達の成長は見ていて著しいものがあった。次年度以降も、是非とも継続していきたいと考えている。

4) ガイダンスの実施

昨年度に引き続いて看護学科に対してガイダンスを行ったほか、府立大学全体ガイダンスを新たな内容で行った。府立大学全体ガイダンスでは、

従来のように単に制度や提供科目の紹介を行うのではなく、「なぜ教養を学ばねばならないのか？」について、根源から学生達に問いかける講演を行った。歴彩館大ホールでの50分以上の講演であったが、学生達が真剣に耳を傾けてくれていることが実感できた。今年度の履修に繋がってくれたことを願っている。

5) FAQ の作成

毎年実施しているアンケートの自由記述欄には共同化教育の趣旨や履修方法、成績評価などについて、同じような問いかけが散見された。そこで、それらをまとめてFAQとして三大学の学生に読んでもらうことを考えた。いささかサービス過剰とも思えるが、昨今、履修案内やシラバスなどにおいて、学生に対する丁寧な語りかけを心掛けることを実践している大学も少なくない。また、同じような問いかけがあることは、学生達の間で共同化教育に対する共通する疑問があることを意味するわけで、それを放置しておくことは好ましくはないと考えられた。そこで、リベラルアーツセンターで原案を作成し、機構運営委員会で議論の上、公開することとした。このFAQによって、共同化教育に対する学生の理解と信頼が高まり、履修意欲の増強に繋がっていくことを願っている。

以上、本年度のリベラルアーツセンターの活動を総括した。これらの活動の根本には三大学教員や事務職員の理解と協力があったことは言うまでもない。改めて深く感謝する次第である。来年度も引き続き、リベラルアーツセンターが主体となって、新規科目の企画・構成や既存科目の見直しを行っていききたいと考えている。

(2) 宿泊研修の実施

京都三大学教養教育研究・推進機構 特任教授
播磨 弘

(1) 研修企画の経緯

京都三大学教養教育研究・推進機構（以下、機構）は、平成 28 年度に初めて「京都の歴史的・地理的特性を生かした宿泊型」研修の企画・実施に取り組んだ。この事業の目的を平易に述べると、教育システムを異にする三大学の学生が京都府内の市町村におもむき、地域課題を実際に共同で体感することを通して、以後の学生生活や研究課題への取組に役立てるとともに学生間の交流を一層深める点にある。具体的には、平成 28 年 9 月 15、16 日に京都府中丹地域（綾部市）への宿泊研修が実施され、大きな成果を収めた（成果の詳細は「平成 28 年度報告書」に掲載）。

平成 29 年度においても同様の企画継続が強く望まれたことから、機構では入念な事前検討を経て、京都府南部地域（相楽郡和束町）にて宿泊研修を実施することとした。和束町は京都府南部の南山城地域に位置し、緑豊かな山腹に茶畑が広がる宇治茶の主産地である。「茶源郷」とも呼ばれ、美しい景観や文化的資産を有する地ではあるが、一方では人口減少の悩みを抱える地域でもある。学生には美しい自然に接するだけでなく、生きた研修の場として和束町で生活する住民や行政担当者との熱い交流を通じて、地域の歴史や今に抱える諸課題を認識させ、さらに課題の打開策を考えさせたい。このような研修のねらいに沿って、具体的な研修計画が立案された。立案には昨年度同様に、機構からリベラルアーツセンター長の石田昭人教授（京都府立大学生命環境学部）が中心的役割を果たした。さらにこれに都会の若者と地方都市の山間部を結ぶ「まち冒険」や「コミュニティーナース」といったプロジェクト活動を実施して大きな成果をあげているボノ株式会社の谷津孝

啓氏にアドバイザとして協力いただき、学生達の現地ワークショップとフィールドワークをきめ細かく支援してもらうこととした。

なお、今回の研修計画では京都府立大学から和束町に至る途上に位置する「けいはんなプラザ」を第一に訪れることとした。ここは関西文化学術研究都市の中心にある中核交流施設である。科学の最先端を切り拓く拠点として同都市はその人口と共に順調に発展しているが、それと対極的な立場にある和束町とを対比させながら、京都府南部地域全体をどのように発展させられるか、その将来像を学生に考察させたい狙いがあった。

(2) 研修の行程と参加者、協力者

今回の研修行程は次のとおりである：

初日：9/14（木）（午前） 京都府立大学出発→けいはんなプラザ視察→（午後）和束町内調査（茶畑景観、農家民宿、茶工場、茶摘み体験）→（夜）和束町長による町の課題や施策説明、町長や町職員（8人）との意見交換会→グループワーク。
第2日：9/15（金）（午前）グループでの発表準備・和束町への提案発表会→（午後）「宇治茶ムリ工」認定証取得→和束町出発、（夕刻）京都府立大学帰着。

参加者は次のとおり：研修に参加した学生 17 名（内訳は京都工芸繊維大学 2 名、京都府立大学 13 名、京都府立医科大学 2 名、性別では男性 8 名と女性 9 名、学年別では 1,2,3 年生の順にそれぞれ 10 名、6 名、1 名）に、引率スタッフ 6 名を加えた全 23 名である。また、和束町では堀忠雄和束町長をはじめ、和束町役場、（一財）和束町活性化センター職員の皆様、さらに町内で地域おこしの活動に取り組む方々や茶栽培農家の皆

(2) 宿泊研修の実施

様にご協力を頂いた。以下で行程順に詳細を報告する。

(3) 初日：京都府立大学からけいはんなプラザまで

朝9時過ぎに京都府立大学を出発し、けいはんなプラザに向かうバス中でさっそく研修は



スタートした。谷津氏から、短い研修期間で初対面の方々から有益な情報を引き出すための手法として「アクティブリスニング」が紹介され、そのトレーニングが始まった。学生は隣り合う2座席に初対面ペアで着席し、参加動機や趣味、活動内容などについて互いにインタビューしあった上で参加者皆に自己紹介ならぬ「他己」紹介を行った。



10時半にけいはんなプラザに到着、そのあと約1時間にわたって視察が行われた。(公財) 関西文化学術研究都市推進機構 参与の高田慶一郎氏による関西文化学術研究都市全体の概要説明にはじまり、誘致企業の変遷や都市人口の動態説明、さらに代表的な研究プロジェクトの紹介などがビデオ上映、パンフレット説明を交えて行われた。その後、13階の展



望室に昇って大阪府、京都府、さらに奈良県にまたがる広い京阪奈丘陵に占める同研究都市の位置どりを再確認するとともに、このあとに向かう和束町の豊かな緑の地を遙かに望んだ。



(4) 初日：和束町にて昼食、さらに町内調査、茶摘み体験まで

けいはんなプラザを11時半に出発し、そのバス中で和束町に入るに際してどのように地域の方々から表面的でなく掘り下げた話を聴きだすか、



そのポイントについてあらためて谷津氏から助言があった。12時に和束町に到着。さっそく交流会場「てらす

和豆香」にて、お茶を使った特産品づくりに取り組む「恋茶グループ」のお茶づくり弁当を、詳しい説明付きで賞味させていただいた。碾茶のふりかけ、お茶入り豆腐やコロツケなどからなるお茶の里らしい香りの高い献立であった。昼食を取りながら、お



(2) 宿泊研修の実施



そのご苦労などについて親しく聞き取りを行った。

13時に茶源郷ガイドの会の阿部

忠さんと中川桂子さんの案内のもと、2つのグループに分かれ、徒歩で町内調査に向け出発した。和束町は京都府内の宇治茶の約4割を生産するお茶の産地である。町の中心部を流れる和束川をはさむ急斜面に沿って美しい茶畑が広がっていて、良好な日当たり、朝夕の大きな寒暖差や朝霧などが良質の茶を育むとのこと。事前研修会を通じて予備知識はあったものの、「茶源郷」の名にいかにもふさわしい美しい風景に一行はあらためて感動させられた。特徴的な光景として、どの茶畑にも扇風機の羽根様のものがむき出しで高いポールの上に装着され、風に吹かれてのんびりと回転していた。設置理由を聞くと、霜害の出そうな時期に上層の暖気を強制的に下降させて害を防ぐための工夫であり、その効果は絶大とのことである。



研修の主目的は町民の方々と交流にある。急坂を上り下りする意外とハードな茶畑景観めぐりとなったが、そのなかにちょうど良い休憩タイ

ミングで農家民宿（茶畑なごみ）訪問と碾茶工場（上嶋爽禄園）調査が組み込まれていた。農家

民宿では、本業の茶栽培の傍らで民宿を営むという西山和美さんから香り豊かな水出し冷茶のサービスを受けた。何冊もの宿泊者ノートを読んでみて、日本だけでなく世界各所からリピーターがこの地を訪れ、心癒されていることを知った。多様な訪問者との想い出や交流を楽しそうに語る西山さんではあったが、その表情も茶栽培の



繁忙期（5～7月）の生活について語るときは一変した。「1年の収入のすべてがこの時期に懸かっている最も真剣で多忙な時期」とのことである。

次に訪れた碾茶工場は建物も機器類もすべて新しく、聞けば最近稼働を始めたばかりとのこと。説明いただいた代表の上嶋伯協さんによると、土地を用意するために田んぼを造成し、何人かの仲間が多額の資金を投じ、苦勞しながら手作りで工場を立ち上げたとのことである。自前の工場を持つことでふ



くらむ将来への期待を熱く語る上嶋さんの迫力に、一行は強い感銘を受けた。

約3時間にわたるフィールドワークを終えて、16時に宿泊先（和束荘）に到着した。ここはテニス・フットサルコートやグラウンドも備えていて学生の運動合宿などにも最適の施設となっている。



(2) 宿泊研修の実施



和束荘の裏側急斜面に広がる和束町実験農場の茶畑で学生は茶摘みカゴを各自持って、茶摘み

を体験した。茶の新芽と新しい2葉（1芯2葉）を木にキズを残すことなく優しく摘み取るのがポイントとのこと。意外に難しいものである。

(5) 初日：和束荘にて夕食後、町長・町職員との意見交換、学生ワークショップまで

18時半に夕食を終えた後、その後の和束町長や町職員との懇談に備えて、あ



らためて谷津氏から学生に情報の聴き出しポイントについて説明があった。和束町の「人、場、材料、課題、可能性」の5テーマに絞って情報を引き出して欲しいとのことである。

19時からまず和束町長 堀忠雄氏による町の課題と将来に向けた施策の説明があった（約30分）。物事すべてに正負、陰陽の両面があるように、京都南部地域にも都会的・近代的な町（けいはんな地区）と、一方で田舎の美しい自然と歴史に恵まれた町（和束町）がある。どちらも重要で、それぞれの特長を活かした共存が大切と堀町長は力説した。さらに人口減少に悩まされる町の課題にも触れ、これに対して観光振興などで人を呼び込む様々な仕掛けについても熱く語った。

堀町長の話のあと学生は3班に分かれ、各班

に町長と町職員（8人）が3名ずつローテーションで移動しつつ、上記の5テーマについて熱心な意見交換、聞き取りが行われた。



このワークショップが20時半に終了したあと、再び谷津氏がリードした。学生に5テーマについて収穫された情報を付箋上にメモ書きして、それをホワイトボードに貼り出させた。これをもとにして、翌朝に行う和束町への提案発表会では、6班に分かれて「和束町に人が行きたくなるよ



うなアイデアを考える」というテーマで発表してもらおうとのこと。学生の表情が一瞬落胆したように見受けられたことから、ワークショップが終了



したら風呂にでも入ってすぐに寝られると期待していた学生も多かったのかも

知れない。しかし、さすがに自ら研修に申し込んで来る積極的な学生たちだけにチャレンジ精神も旺盛だった。各班に与えられた模造紙1枚に発表内容をまとめよ、今夜は無制限、との谷津氏の言葉にファイトをかき立てられた全学生は、深夜までかけて資料を準備した班もあったと後で聞いた。



(6) 第2日：朝食後、和束町への提案発表会、振り返りまで



朝8時の朝食を終え、谷津氏より発表会に向けたガイダンスが行われたあ

と、9時半から「若者が和束町に行きたくなるアイデア」について6班に分かれて、発表5分・質問3分を目途に討論・発表会が始まった。各班の発表する模造紙には①茶源郷フェスティバル、②集え!カメラ女子、③和束町マップ(アウトドア版)、④茶好人の仲人和束、⑤若者達よ茶れんじしてみないか?、⑥都会・人・田舎共に高

めあう、というようなタイトルが書かれていた。

各班の発表内容は、町に呼び込もうと



する対象(若者)と同じ世代の学生達が半徹夜して頑張ってまとめ上げたアイデアである。

短時間のうちによくここまで仕上げたものだと私は学生達の能力をあらためて見直した次第である。なお、この発表会には、昨夜の意見交換会に参加いただいた町職員や恋茶グループの皆さん、更には、昨日訪問の農家民宿とは異なる民宿を経営されている女性も御参加いただき、熱心に質問や意見を発していただいたお陰で、発表会は盛況となった。



討論・発表は10時半に終了し、その後フィードバック(総括、振り返り)の対話がフィッシュボウル(金魚鉢)形式で行われた。

これは対話内容を深めつつ、参加者全員で共有するための方法論で、当日は部屋を中心に5つのイスが円形に並べられ、これに4人が座って対話を始めた(1席は空席)。その外側にはさら

(2) 宿泊研修の実施

に多くのイスが円形に取り囲むように置かれ、参加者が着席、待機した。対話に参加したい者が1人ずつ内側のイスの空き席に座ればその輪から1人が外側に出るというルールである。対話のテーマは、和束町に来る前と来てからのイメージ、次に和束町に来るならどんな人に会いたいのか？、宿泊研修に参加したことによる一番の学びは何か？というものであった。対話の中身をここで短く紹介することはできないが、例えば実地体験して初めて得られる情報や現場感覚の重要性に気づかされたというような意見が多かった。対話は11時半に終了し、部屋の後片付けをした。



(7) 第2日：昼食後、大学帰着まで

12時から会場「和豆香」で昼食。その後13時前から同会場で「宇治茶ムリエ」養成講座を受講した。全参加者に急須、湯冷まし、湯飲み、茶托、布巾などが1セットずつ配られ、煎茶を最も美味しくいただく方法について、和束町在住の日本茶インストラクター 松石さんをはじめ3名の方から約1時間にわたって懇切



丁寧な実地指導を受けた。

適切な茶葉の量、湯の温度、浸出時間の3点がすべて満たされた時に初めて美味しいお茶が味わえるということをあらためて実感した次第である。無事、受講者全員に「宇治茶（ちゃ）ムリエ」の認定証が与えられた。

宿泊所（和束荘）裏側にある茶畑を背景に参加者全員で記念写真を撮影後、15時に和束町を発った。バスは予定通り16時半に京都府立大学に帰着した。なお、研修終了後2週間以内を限度に研修レポートを参加学生に提出させることとしている。学生は帰宅後もしばらくは気が休まらないようである。



(8) 研修を終えて

参加学生から集めたアンケートの集計結果を見ると、今回のプログラムすべてに好意的な答えが多かった。なかでも初日夜の和束町長や町職員との意見交換会、さらに翌朝のグループ討論・和束町への提案発表会は印象的であったようである。農家民宿や茶工場の視察、「宇治茶ムリエ」養成講座などもそれらに劣らず好評で、現地の方々との真剣な対話が学生の心に深く響く何かをもたらしたように思う。「良い経験になった、成長できたと感じる、来年も期待している」など、学生たちの充実感や達成感を伝える感想も多く聞かれた。これらの熱い声は、この研修の準備に加わったすべてのスタッフや、お世話いただいた多くの現地関係者に対するこの上ないご褒美となる。ここで

(2) 宿泊研修の実施

すべての関係各位のご尽力にあらためてお礼を申し上げます。終わりに、この研修の主役は参加した学生達であり、ぶっつけ本番の現場で見せてくれた彼ら自身の奮闘ぶりにも敬意を表したい。

(研修支援) ボノ株式会社取締役最高執行責任者
谷津孝啓様、高木香緒里様

(現地協力者)

(公財) 関西文化学術研究都市推進機構

参与 高田慶一郎様

恋茶グループ 代表 藤木優里香様を

はじめとするグループの皆様

茶源郷ガイドの会 阿部忠様、中川桂子様

農家民宿なごみ 西山和美様、

上嶋爽祿園 代表 上嶋伯協様、

農家民宿えぬとえぬ 北 紀子様

日本茶インストラクター協会京都府支部

松石三重子様、松石博美様、大西典子様

和束町 町長 堀忠雄様、地域力推進課長

犬石剛史様をはじめとする職員の皆様

(一財) 和束町活性化センター 下村美香様を
はじめとする職員の皆様

相楽東部未来づくりセンター長 姫野孝宏様

をはじめとする職員の皆様

(引率) 機構特任教授 播磨弘、リベラルアーツセ
ンター長 (府立大学教授) 石田昭人、府
立大学公共政策学研究院院生 中川こころ、
機構事務局 藤澤正典



(3) 教育 IR センターからの総合報告 – 2017 年度 (平成 29 年度) –

京都三大学教養教育研究・推進機構 教育 IR センター長／京都工芸繊維大学 教授

萩原 亮

はじめに

本年度より、教育 IR センター長を務めさせていただきます。‘機構’の立ち上げに至る経緯やこれまでの運営体制に関する知識について大変心もとない身であることを自覚しておりますが、当初のしがらみから離れた者の視点を加えることにも、今後の定常・安定的な運営につなげていく上で、いくばくかの意味があるだろうと考え、お引き受けした次第です。皆様のご協力をいただきながら、微力を尽くす所存ですので、どうぞよろしくお願いいたします。

任務を開始するにあたって、「教育 IR センター」の役割を規定するキーワードとおぼしき‘IR’の意味を把握しておくことが必要であろうと考えた。おそらく多くの方もこの略語には馴染み薄であろうと察するので、前置き風にはなるが、このことから述べさせてもらう。‘IR’は、Institutional Research の略称であり、日本語訳としては「機関調査」あたりが適当であろう。企業における経営戦略的な情報を集積・分析する部門を指し、米国の大学においては、この部署を設けることが既に一般化しているようである。我が国の行政的プロセスを経る中で、原義からずれた意味合いが付加されることもあるようだが、アルファベットの略称をそのまま使って導入するからには原義にしたがって理解するのが適切であろうし、その方が意義も理解しやすい。すなわち、「教育 IR センター」とは、教育プログラムを（経営戦略的側面まで考慮して）策定するために役立つ情報を集積・分析する役を担う中心となる部門である。

ただし、当センターの構成員は三大学に分かれて所属する教員であるから、組織的な活動にはかなりの制約がある。また、三大学それぞれの意思決定機関との関係のとり方も定まっているわけではない。現段階の当センターは、IR 活動としてどのようなことができるのかを探る先遣隊のよう

な役目を担うものと見なすのが相応しいだろう。注力すべき方向をあれこれ手探りしながらのスタートになり、手際が悪く映るかも知れないが、各位には、こうした事情・状況をお察しの上、当センターの報告をご覧いただき、参考になるところだけをピックアップしていただければよいと考えている。

以下の報告に先立ち、（今後にも通じる）基本方針を一点明言しておきたい。IR 活動の趣旨はあくまで総合的な調査・分析にあり、特定した授業科目の一つ一つに視点を合わせることではない。それぞれの授業の価値を向上させる原動力は、各担当教員の自発的な意思以外にないことに論は要しないだろう。

1. 履修登録者数の歴年推移

共同化授業科目ごとの履修登録者数のデータは、機構事務局のもとに集まり、整理された形で毎年公表されている（今年度分は本報告書第 1 部に掲載）。本年度は、共同化科目開設以来 4 年分のデータが蓄積した段階にあたるので、ここで、IR の観点から、歴年の科目ごとの履修者数の変化としてグラフにまとめ、科目間の受講者の移動その他の変遷の様子を分析してみよう。

まず、授業科目を、前期開講群と後期開講群に大別し（前期と後期が途中で移った科目は今回の調査からは割愛した）、両群の各科目の確定受講者数の年度に対する変化を、図 1（前期科目）と図 2（後期科目）に示す。人数は、科目によって大きく異なり、それぞれの変動の様子は比の値で追いかける方が把握・比較しやすいので、受講者数を（2 を底とする）対数値に換算してグラフの縦軸量としている。科目別の人数を追跡する形をとっているが、（前述のように）科目を特定することは眼目でない。ただし、各科目の担当者が自らのクラスの人数変動の様子を観る場合に備え、科目ごとに仮の ID 番号を付し、その番号と科目

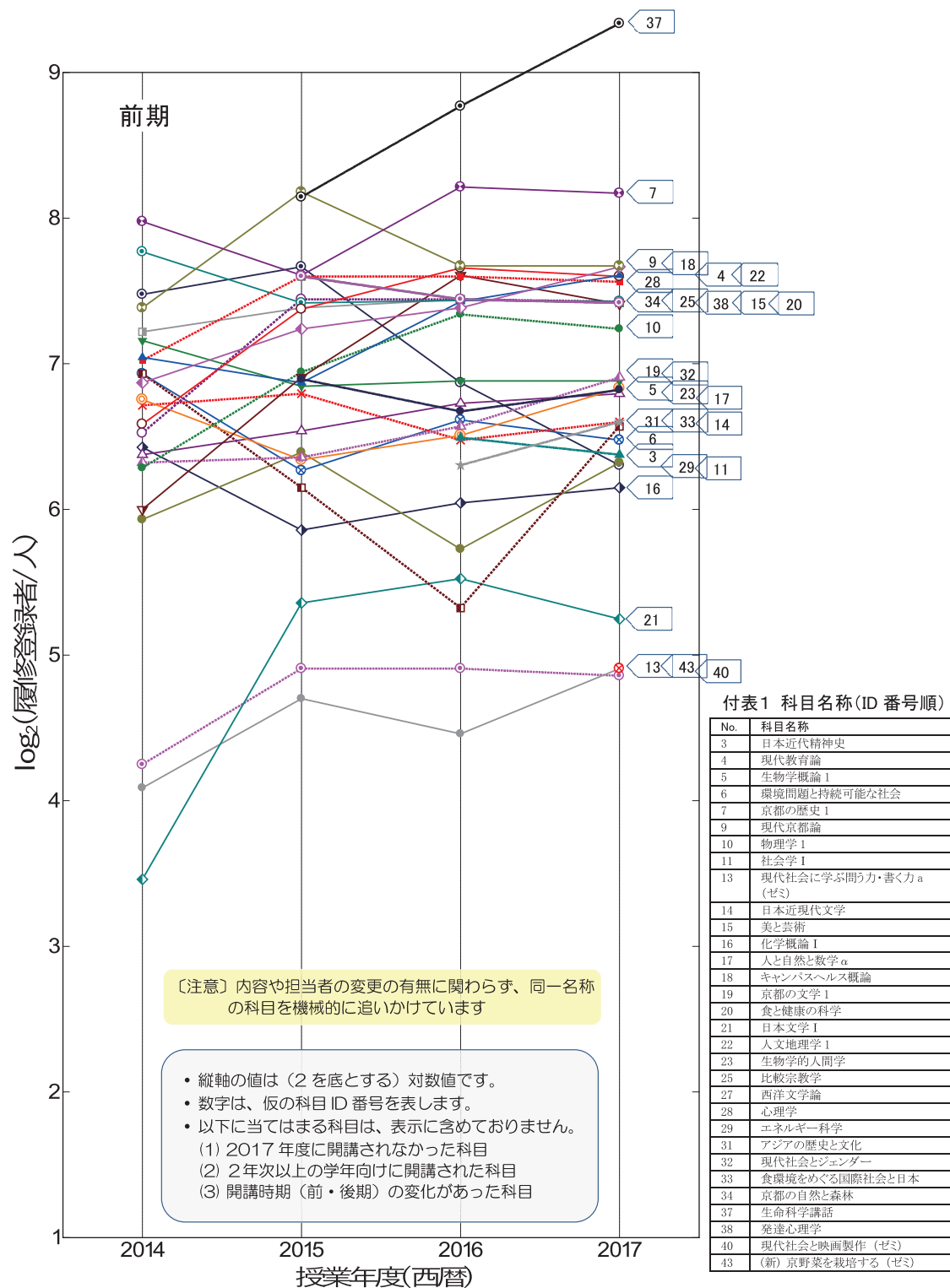


図.1 各科目履修登録者数の歴年変化 (前期開講分)

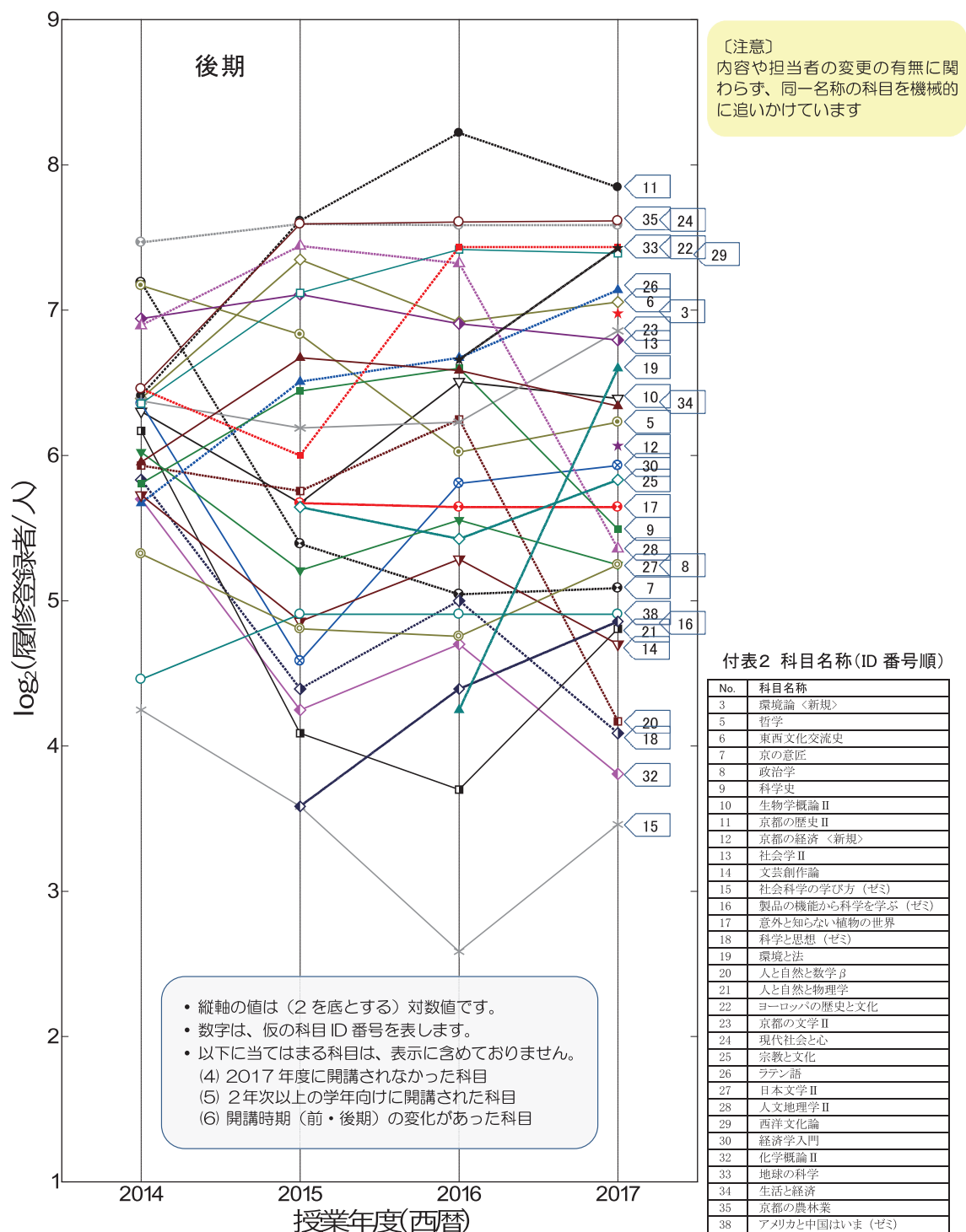


図.2 各科目履修登録者数の歴年変化 (後期開講分)

名称との対応をそれぞれの付表として掲載した。

個別のラインにとらわれることなく、状況を大局的に眺めると、図 1 と図 2 の傾向に明確な相違があることがわかる。まず、初年度から 2015 年度への変化はかなり劇的であった。前期科目の受講者は、総じて上昇傾向を示したのに対し、後期の履修者は、顕著に増えた科目と減った科目に二分される傾向を示した。その後の年度では、科目ごとにまちまちの推移を辿りながらも、総じて見れば、2 年目に生じた激変が徐々に緩和して、定常状態に向かう傾向にある。ただし、前期科目は、受講者数が高値止まり的に安定化する気配であるのに対し、後期科目の方は、人数分布がかなり広がった状況が常態化する様相である。

初年度の履修希望動向に基づいて、2 年目からは、各科目の人数制限が手直しされ、学生が希望する科目をとりやすいように工夫されているが、その効果が人数分布の顕著な変動に結びついたことが明らかである。その後 2 年を経て、過渡状態をほぼ脱して本年度に至っているように受けとれるので、しばらくは手を加えずに見守るのがよいとの判断もできる。ただし、図 1,2 の今年度の状態が目指すべき最適解ではない。後期開講科目の人数分布の広がりはやや大きすぎると判断している。もちろん、講義内容の多様性と、学生の選択希望を満たすことを両立させようとするれば、人数の差が生じることは必然である。また、人気を集める講義と、受講者が少数であることを前提とした内容の講義が併存するのも大いによいことだと思う。しかし、多人数に過ぎれば双方向的な授業は難しくなるし、逆に、期待に比べて人数が少な過ぎれば、担当者の意欲の消沈にもつながる。学生の履修動向として、科目数をできるだけ前期に寄せる傾向が明らかになったのだから、いわゆる集客力の高い人気科目を後期に多く配することで、学生の希望を損なうことなく、受講者数をある程度平準化することが可能ではないかと考えている。さらには、特に大人数が予想されるクラス

の時間割を先に定め、他の科目の担当者の時間割希望の参考にしてもらう方策も検討に値するだろう。いずれにしても、IR の情報を、(単に書類作成の情報源とするのでなく) 現場の皆さんにとって有益な形として提供できるか否かが、この制度が本格的に定着し得るかどうかを握っている。ご担当者各位からのご提案にも期待を寄せるところである。

2. 1 年次生アンケート

共同化科目を実際に受講した 1 年次生を対象に、各年度の後期の最終段階で、Web フォーム入力形式のアンケート (資料編 P.94~95) を実施している。個々の学生の行動として、どのようなパターンで科目を履修登録しているかを把握することができ、人数制限と抽選の方式の問題や、科目構成等に関する意見もここで吸い上げることができる。

(本年度分は執筆時に間に合わないため) ここでは、過去 3 年分の回答の歴年データのうち、平均値ポイントとしてグラフ化できる項目をピックアップして、図示してみよう (図 3 (a) ~ (e))。グラフの縦軸のポイントは、回答値の人数に対する重み付き平均であり、それぞれの意味を、各グラフの右側に記している。

(a) の履修登録科目数の変化からは、初年度以降に、履修科目数が前期へシフトした様子が明確に見て取れる。前節の図 1,2 で示したクラス人数の推移は、この前期への人数シフト傾向と密接に結びついて生じている現象である。

(b) は、履修者制限のための抽選方式に対する肯定のポイントであり、3 年の間に顕著な上昇を果たした。3 年目のポイント約 2.6 は十分に高い値であり、2 年目において行われた学生の科目選択に関する配慮は功を奏し、以後もその状況が保たれている。

(c) は、科目の満足度の最高と最低を問うた

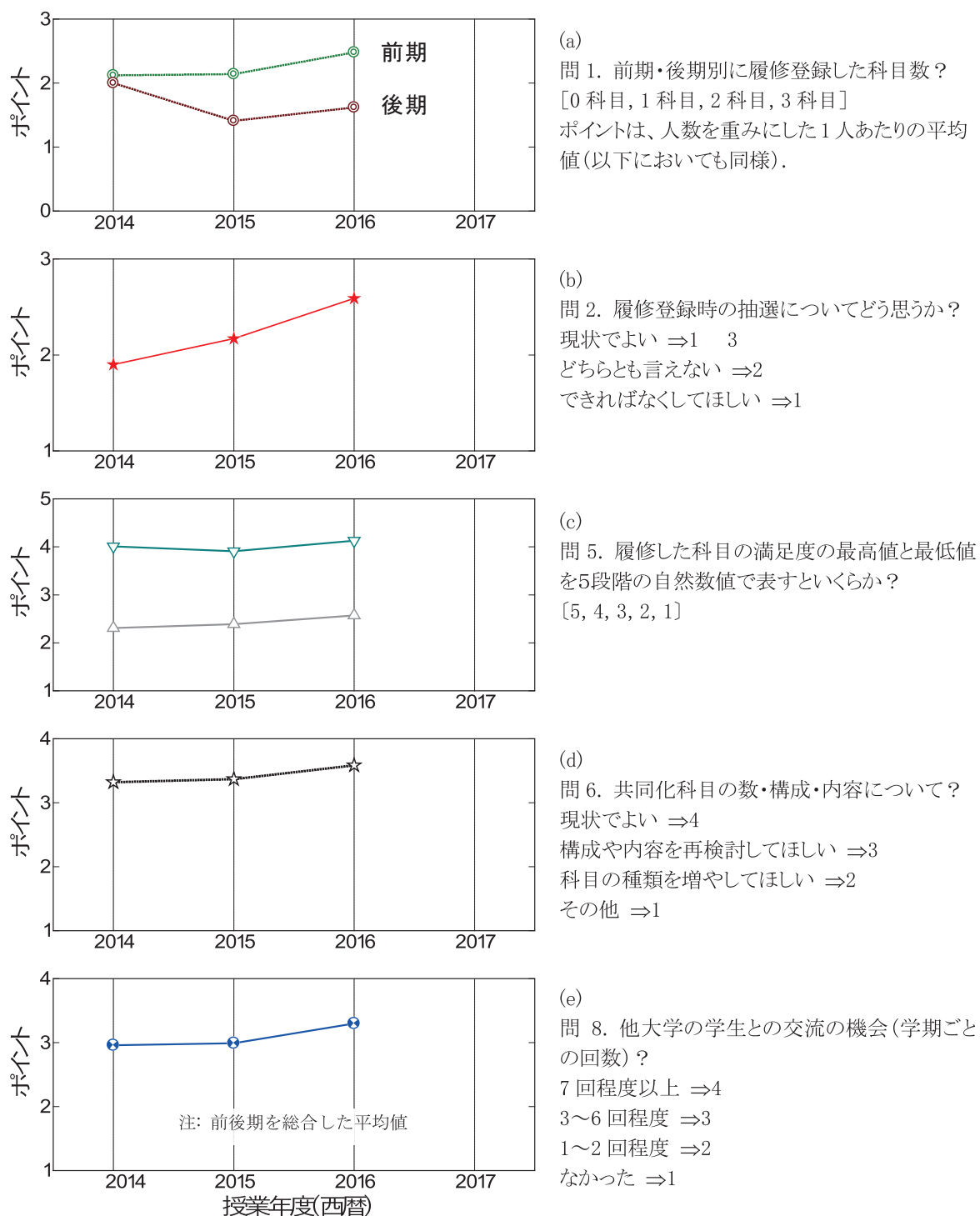


図.3 1 年次生アンケートのいくつかの着目項目に関する、数値回答の平均値(ポイント)の歴年推移。
(縦軸のポイントの意味はグラフごとに異なる。それぞれの右側の説明を参照されたい。)

結果である。最高値 4 程度が維持されつつ、最低値が若干上昇するという好傾向も窺える。

(d) は共同化科目全般を評する答えである。回答は量的でない数字であり、平均値に正確な意味は与えられないが、2016 年の多数 (72%) の者が「現状でよい」と答えている状況は、既に飽和的な値を達成したように解される。今後は、プログラムの拡張よりも、安定的な運営に注力するのがよいだろうし、ケースに応じて講義内容に基づく著作活動を支援する方向性も検討に値するだろう。

(e) は他大学との学生交流の頻度を問うたものである。ポイントが着実かつ加速度的な上昇を示した推移は、ご担当者各位が学生交流に対する意識を高め、実効性のある工夫をされたことの反映に他ならない。

3. 共同化科目担当者会議 および教員アンケート

各年度の注目に値する科目の担当者の中から、数名の方に、授業内容や学生の反応等に関して報告していただき、意見交換をとおして実践上の工夫や問題などの情報を共有するための「共同化科目担当者会議」を毎年開催している。本年度は、10 月 30 日に、以下 3 名の方々のお話しをお聞きする形で実施した。

- ・ 峯拓矢 (「人と自然と数学 a」担当)
- ・ 青地伯水 (「映画で学ぶドイツ語と文化」担当)
- ・ 藤田佳信 (「文芸創作論」担当)

本報告書第 3 部には、これら先生方の寄稿が含まれているので是非ご覧いただきたい。フロアを含めた意見交換も活発になされた。当日の参加者は 32 名であり、今後さらに盛況になることを期待したい。

また、各年度の授業が終了する 2 月には、共同化科目の担当者全員を対象として電子メール形式の「教員アンケート」を実施する。担当者会議

に参加できなかった方からも声を聞かせてもらうためのものであり、例年よりも肩の力を抜いて答えられるように小改良したつもりなので、担当者各位がお気づきのことを何なりとお伝えいただきたい。

4. 授業評価アンケート

各大学独自の授業アンケートとは独立に、共同化科目用のアンケートを各学期の最終段階に実施している。印刷物ベースの無記名アンケート (形式は資料編 P.93) であり、結果は、機構事務のもとで (委託業者も使い) 集計・チャート化した上で、各大学の教務事務経由で、個別に、各担当教員宛に送られる。各担当者において、授業内容の一層の工夫・進展の参考にしていきたい。なお、本年度後期からは、府立大の所属学科についての問いを無くすように変更を加えたことを付記しておく。

むすびのひとこと

高等教育における教養の意義が何であり、何をもちってその授業の価値が決まるのか、私なりに考え巡りつつこの共同化科目に関わってきた。一つの答え方として、職業専門外の問題に対して、他者の判断基準や大勢意見に安易に頼ることなく、謙虚でかつ自信をもって、総合的に正しい判断に到達する力を引き出す教育であり、人の生涯のタイムスケールで観て、その目的にどの程度貢献したかが価値を決めると言えるだろう。

ただし、それを目指す取り組みは大難事である。効率を競うべき業務とは違う。真の結実に向かった着実だが僅かずつの価値ある足跡は、書類上に表せない部分に刻まれていることを十分承知している。

第3部

共同化科目の授業研究

(1) 数学史と教養教育について

(科目名：人と自然と数学α)

京都工芸繊維大学 教授

峯 拓矢

「人と自然と数学α」は、古代エジプト文明・メソポタミア文明から現代に至るまでの数学の歴史を概観し、数学に現れるさまざまな概念や計算法の起源を学ぶことを目的とした科目です。いわゆる歴史の授業と異なるのは、歴史上用いられた計算法を（多少現代風にアレンジして）授業中に実際に演習してもらうところです。演習では、110名程度の受講者を1グループ5、6名、計20グループに分け、グループごとに相談して課題の問題に取り組み、答え合わせして提出する、という形をとりました。この授業形式は前任の大倉弘之先生の発案によるものですが、今年度はさらに、最終回の講義で各自が自由に研究してきた課題についてグループ内での小規模な発表会を行う、という試みを行いました。

洗練された現在数学の観点から見ると、古代に用いられた計算法の多くは非効率なものです。しかし、そういった生まれただけの計算法には、人間の生の発想や、当時の実生活からの要請・宗教観などが如実に現れています。それを学習することで、大学受験の勉強では単なる道具でしかなかった数学公式が、長い年月を掛けて人々が作り上げた努力の結晶だと知ることが、この講義の目的の一つと言えるかと思います。期末試験時の感想文では、下記のようなものがありました。

「高校までや他の数学の授業とは異なり、歴史や古代の数学、様々な国の数学について学べてとても面白かったです。あまり勉強・勉強という感じではなく、雑学的な面も多かったので入りやすかったです。」(工織大・デザイン建築・1回生)

「一番驚いたことはシュメール人が $\sqrt{2}$ の近似をできていたことです。とても楽しい講義でした。」(工織大・機械工学・1回生)

古代の計算法は現代数学の原点ではあるのです

が、洗練されていない計算法は初学者にとってはかえって難しく感じられます。そのような課題の演習を行うために、上述のグループ単位での学習を採り入れました。初めて行う計算でも、グループのメンバーと相談しながら考えることで計算法を理解でき、同時にメンバー間の交流が深まるということが期待されます。期末試験時の感想をいくつか挙げておきます。

「グループで協力することによって、他大学の学生と交流を深めれたのはよかった。」(工織大・応用化学・1回生)

「難しいことも多かったけど、グループで話し合うことで乗り切れた。課題は難しかったです。」(工織大・電子システム・1回生)

概ね好意的な感想が多く、三大学共同化科目の趣旨にも沿った結果であると思います。ただ、グループの一部の優秀な学生のみが問題を解き、他のメンバーはそれを写すだけになる、といった懸念もあります。それを避けるため、なるべくメンバーごとに異なる問題を解くような課題を出す、などの対応を行いました。また、グループ学習にあまり積極的でないような学生も一部に見受けられました。どの学生にとってもやりがいのある演習の方法を、今後も検討して行こうと思います。

最終回に行った発表会では、各自異なる課題について行った自由研究の発表を行いました。時間的制約のため、発表はグループ内で他のメンバーに対して説明する形を取り、グループ内での発表が終わった後は自由に他グループの研究を見学する時間を取りました。課題内容については教員側で見本をいくつか提示し、そこから選んだ課題を調べて来た学生もいましたが、まったく独自の課題を自分で探して研究した学生もいました。ただ、共同化科目担当者会議の際にもご指摘を受けまし

たが、こういった自由研究課題を課すと、学生がインターネット上からレポートを見つけて丸写しにする、と言った懸念があります。そもそも「数学史」という話題の性質上、なんらかの資料をインターネット上で検索することは避けられないので、むしろ積極的にインターネット上の資料を引用する際のマナーについてこちらからレポートの書き方の見本を与える、という形の指導を行いました。また、調べて来た内容をただ教員にレポートとして提出するのではなく、他の学生にも説明させるという形を取ることで、より深く内容を理解させることを促しました。期末試験時の感想を挙げておきます。

「最終レポートでの発表では様々なことを調べてきていて面白かったです。」(工織大・電子システム・1回生)

講義の難易度については、どちらかと言えば(後半の多少専門的な内容について) 難しかった、という感想が多かったようです。講義全体としては好意的な感想が多いようでした。

「計算問題は初めてのものばかりで難しいものが多いと感じました。今回のテスト問題は講義の問題よりも難しかったです。講義の内容としては、歴史的な背景も知ることができたのでおもしろかったです。」(工織大・応用化学・1回生)

「理系科目が苦手なのでかなり難しかったけど、原理や歴史は面白いと思いました。」(府立大・生命環境・環境デザイン・1回生)

「内容が難しく理解しづらいテーマもあったが、数学の始めを知れたり、公式の証明を教わる事ができて、今まで丸覚えしていたものが、理屈を理解できるようになったことがあって非常に良かった。また、グループでの活動が主だったので、わからないところを気軽に質問でき、授業の理解度

も深まったので良かったと思う。」(府立医大・看護・1回生)

講義の難易度に関しては、今後とも内容を取捨選択することによって調節して行きたいと考えています。

今回は1年目の講義のため実験的な試みも行いましたが、講義の難易度・グループ学習のやり方など、改良すべき点もいくつか見えて来ました。教員自身の教養が試される科目でもありますので、今後も授業内容について研究・検討を重ね、より興味深い講義づくりを目指していきたいと思えます。

(2) ドイツ映画を用いて、相互の意見の確認と議論の喚起

(科目名: 映画で学ぶドイツ語と文化)

京都府立大学 教授

青地 伯水

この授業のコンセプトは、そのタイトルが語っているように、いっぽうにはドイツ映画『点子ちゃんとアントン』のドイツ語のシナリオを詳細に検討することがある。他方は第二次世界大戦から「六八年」くらいまでのドイツの政治・世相を反映した映画を断片的に見て議論することであった。この二つを限られた 30 時間のなかでおこなうことに限界があることはわかっていた。つまり半分以上の時間をさくシナリオ研究に、それほど教育効果があがらないと思えた。

当初からの懸念の原因は、ドイツ留学経験（1 か月または 5 か月あるいは両方）のある京都府立大学欧米言語文化学科の学生とそれ以外の学生のドイツ語力の差が歴然としているからであった。ところが授業評価や授業以外の対話で、もっとシナリオ研究をしてほしかったという意見に触れた。ドイツ語能力にかかわらず、映画のなかで語られている少しでも日常のドイツ語に学生諸君はおおいに関心を持ってくれた。日常的という点では、たしかにドイツ語は英語とは日本における環境が異なっている。したがって、こちらが自己規制せずに、シナリオをもちいたドイツ語トレーニングにむかうべきかもしれない。

一方、映画を断片的に見せて学生と議論するのは、意外とうまくいったと自負している。もちろん映画を断片的に見せることじたい、ある意味において議論を誘導しているのかもしれないが。ともかく 40 ～ 50 分に映画を編集し、学生に授業の時間内に見てもらい、レポートを最後の 10 分に 200 字書いてもらう。その原稿を担当者がまとめて、次の授業の冒頭で配付し、それに関する議論をする。受講者が 10 名以下であったのでこのような運営が可能であったのだが、全員に発言の機会をまず与える。また必ず発言の機会があ

ることで、議論に参加しているという感覚を受講者全員に持たせることができる。自分とは異なる意見に接して、自発的に発言してくれる学生もいた。

具体的に例をあげるなら、ベルンハルト・シュリンクの小説『朗読者』をハリウッドが映画化した『愛を読むひと』についての議論は興味深いものであった。ナチス時代にユダヤ人の女性を監禁し、死に至らせてしまった主人公ハンナの立場に立って、考えることが学生に出した課題であった。「自分も同じことをしてしまったであろう（かもしれない）」というのはごくノーマルな反応であると思う。しかし一歩進んで考えると、「なぜ主人公はそのような立場に置かれたのか」、「その立場にいたるまでに何ができなかったのか」という問いかけをしてくる学生がいる。これらはわたしがいままでも文学部の学生を教えていて、えられた反応であった。

ところが今回理系の学生から、「そんな特殊な極限状況に立たされた自分を想像できません」という反応があった。きわめてナイーブな反応のようにも思える。しかし容易にたどり着いた模範解答に対する辛辣な批判にも聞こえる。「あなたたちは本当にそんな極限状況を想像しているのか」と。タイプの違う学生とその反応に接することは、教員にとってもおおいなる学習の機会であると痛感させられたのである。

(3) 課題エッセイ〈読書感想文〉を読む

(科目名: 文芸創作論)

京都府立医科大学 特任教授

藤田 佳信

はじめにーオリエンテーション

初講のオリエンテーションでは、まず初めにアンケート調査を行います。

アンケート用紙には、受講の理由を訊く項目があります。「文芸創作論を受講する理由(目的)は何ですか?」との問いに、色々な答えが返ってきます。

比較的目標立つのは、「文章の書き方(技法)を学びたい」でしょうか。とは言っても、本科目が単なる文章教室、だと誤解されているわけでもありません。「なんとなく科目名が気になったから」という記述は、文芸創作論なるものの正体?がよく分からない、とも読み取れるでしょう。「文芸創作はなんとなく理解できるが、文芸創作論とは何だと思ったから」というのもありましたので。

「文芸を学問として見る機会が欲しかった」「文字というものの見識を広げたい」という、人文学志向の回答もあります。

受講の理由は、<書く技術の習得>から<学問として学ぶ>まで、様々です。回答を一覧表にしてみると、「～したい」という表現が、くり返し目に飛び込んできます。若い人たちの意欲が直に感じられる回答で、担当者としては、とても励まされます。

アンケートが終わると、成績評価の方法や目標・課題、講義概要などについて話します。

文芸とは何か、文芸創作論で何をするのか等について、筆者自身の考えを話します。それから、本年度のキーワードー声と文字、についても話しました。声と文字、あるいは<はなしことば>と<文字言語>について。

参考のため以下に、パワーポイントのスライド原稿を記載します。

(本科目で対象とする)文芸とは何か:

- 1) 文字で書き表し、印刷された近代の人文芸 (the humanities)
- 2) 欧米化で俄かに誕生した、近代日本語で書かれた文芸 (literary art)

文芸創作論で何をするのか:

- 1) 「書く」について考える
- 2) 「近代日本語」の誕生と特性について学ぶ
- 3) 近代の文字(漢字カナまじり文)で表現するための、創作技法を身につける

目標:

講義に意欲的に参加し、文芸作業(読む・書く)をしながら

- 1) 問題意識・方法意識を高め
- 2) 創作態度と技法を身につけ
- 3) 自分自身の思いを主体的に表現し
- 4) 他者に向かって発信する

「発信する」の目的は、自分が何を表現したのか確認するためです。ひとに見てもらい評価してもらって初めて、自分が何を表現したのか確認できます。

もちろん、ひとに見てもらって、という所まではなかなか行けません。そのため現実的に優先するのは、3)の<自分の思いを表現する>になります。

最終目標として、オリジナルなエッセイ3編を創作する

- 1) 読書感想文(本年度は、深沢七郎『橿山節考』を読んで)
 - 2) 身辺雑記
 - 3) 紀行文
- (各1,000～1,200字)

成績評価の方法:

文芸作業の書く努力とエッセイ創作を評価

- 1) 文芸作業の課題を毎回提出(翌週にフィードバック)
- 2) エッセイ3編を創作し、期日までに提出



1. 「読書感想文」を創作するとは?

授業がスタートして間もない頃に、質問が出ました。課題エッセイ3本(読書感想文・紀行文・身辺雑記)創作についての質問です。筆者の求める<創作する>の意味が、分かりにくいようなのです。特に、感想文を創作するとは?

(受講生の質問は、ありがたいです。筆者の説明不足を反省あるいは説明方法を工夫する、とても良い機会ですから。どんどん質問してほしいのですが、望み通りにはいきません。)

受講生の問い 本を読んだ感想を書けばいいのか、それとも『檀山節考』論のような形で内容を考察すればいいのか、どちらでしょうか?

筆者の答え 形式は問いません。形式とは、評論・手紙・日記・エッセイ・小説・談話の語り・芝居の独白など等のことです。手紙形式なら、例えば、だれか親しい人に『檀山節考』を薦める形の書き方が考えられます。

形式は自由ですが、作品を書く際には、(原則として) 以下のような創作の手順を踏んでください。

読書感想文を創作する手順:

ステップ1 作者の立場で、自分自身のテーマを中心に思いをまとめる

1) 『檀山節考』を読んで感じ思うことすべてを、思いつくまま素直に飾らず、できる限り詳細に書きとめる。メモ風に。あるいは文章の基本である**パラグラフ**単位で、まとめて書いておく。

2) 1で書きとめたことの中から、テーマ(自分がぜひ言いたいこと)を一つ探し出す。

3) 一つだけにしぼったテーマを中心に、書きとめたバラバラの事柄を一つに、できるだけ簡潔にまとめる。

4) まとめた文章全体を読み直し、テーマから横道にそれた部分を削る。あるいはまた、足りないと思うことを加筆する。

5) 完成した文章を改めて、もう一度読み直し、**タイトル**をつける。

タイトルをつけるのは、自分の思いに名前をつけることで、思いは名前をつけて初めて存在することになる。タイトルをつける基本は、テーマを的確に表していること。自分自身が書いた文章を、誤読しないように十分に注意する。

6) 筆者から与えられた読書感想文の**トピック**(お題)は、深沢七郎『檀山節考』なので、サブタイトルを「深沢七郎『檀山節考』を読んで」にしておく。

大切なのは、テーマとトピック(タイトルと**サブタイトル**)を分けて考える(分析的思考をする)こと。

自分が言いたいこと(テーマ)を優先させるあまり、トピックを忘れてしまわないように注意する。タイトルをつけて、完成!

ステップ2 **読者**(あるいは**編集者**)の立場で、ことばを選択、文末詞・文体・

文脈などに意識を集中して、読み直しながら編集する

- 1) 書き手の自分から離れ、読者の立場で完成した文章を読み直す。基本的に、読みやすい文章をめざす。パラグラフを分け、長い文を短く分けてみる。分ける(分析的思考)の訓練をする。
- 2) 文章を読み直し、タイトルを再考する。テーマにぴったりな、あるいは読者にアピールするタイトルを、読者(あるいは編集者)を意識しながら、複数考えてみる。
- 3) 原稿を誰かに黙読してもらい、感想を聞く。感想を聞いて、表現したいことが十分に伝わっていないと感じたら、さらに考えて加筆修正する。
他者の意見には、素直に耳を傾ける。誤読していると思っても、腹を立てない。
- 4) 身近な人に、文章を自ら声を出して読み(音読して)聞かせ、感想を聞く。感想を聞いて、表現したいことが十分に伝わっていないと感じたら、さらに考えて加筆修正する。
自分にとっての、音読の効用についても考えてみる。
- 5) 完成した感想文をしばらく寝かせておき、熟成させる。それから再読し、a) テーマが十分表現できている b) テーマが読者に伝わる、<これでよし!>と思えたら**文責**の主(自分の名前)を書く。

最後に誤字脱字をチェックし、完成!

(太字の語は、本科目のキーワードで、<読む・書く>の指針になってくれます。)



2. 「深沢七郎『檣山節考』を読んで」を読む(1)

深沢七郎の短編小説『檣山節考』(1956)は、老いた母親を冬山へ捨てに行く、姥捨山の話です。若い受講生には、非常にショッキングな物語だったようですね。

以下に、課題エッセイを幾つか紹介したいと思います。

「読んでいる最中、心が重く、暗い気持ちになった」で始まる、エッセイがありました。タイトルは「因習と人々」。文中に、「恐ろしさ」「残酷さ」「怖かった」という表現が目につきます。「又やんは崖から突き落とされた。この場面が本当に怖かった」とあります。そしてエッセイは、こんな風に終わります。「不気味な雰囲気漂う世界観や又やんとその息子の存在からその因習の残酷さも同時に伝わってきた。」真剣に怖がっている感じが表現されていて、とても良かったです。

「読後に残るのは虚しさだ」という感想もありました。あるいはまた別の、芝居の独白仕立てのエッセイは、「檣山節考は、現代とは違う田舎の村の人々の思考を知るために読む、程度の気持ちで読むのが一番かもしれないわね・・・」と結ばれています。この文章の作者もまた、「因習と人々」の作者と同じように、描かれた世界が<怖かった>のかも知れませんね。異質な世界観、近代的なパラダイムの中で生きる人間には、実際、非常にショッキングな物語ですから。

一方、全くとってよいほど、読後感が異なるのは、「幸せな老人としてのおりん」です。「爽やかな読後感」について述べられていました。「おりんが遺したもの」も同じく、「登場人物の視点

で結末を解釈すればこの物語の印象も変わるのだ」と述べています。「救いのある最後」について考察した「檜山まいりに向き合うということ」は、主人公・おりんの心のあり方や行動に救いを見えています。「おりんにとっての檜山」も、信仰心と家族愛に注目し、おりんの視点から論じています。

「箱」は、死をめぐる思索。「箱」という意味ありげなタイトルが、どこか不気味で、ユニークです。タイトル自体が、単なる読書感想文ではなく、叙述内容はオリジナルな創作だと主張しています。作品中の歌に注目した感想文が2点ありました。「歌のもつ意味」と「反近代の歌物語」です。いずれも優れた感想文だと思いました。

ホームドラマの一場面を覗き見るような、小説仕立てであれば、芝居の独白ふうもありと、表現の形式は自由です。評論形式でも、関心の有りどころは様々です。現代の社会的事件と比較し関連付けるのは、ジャーナリズム的な発想。「神聖な場所として描かれる檜山」は民俗学志向のエッセイで、着眼点が良かったです。

3.「深沢七郎『檜山節考』を読んで」を読む(2)

年が明け、また受講生の読書感想文を読んでいます。読むのは2回目、です。課題エッセイ3編のうち、読書感想文だけは早く、提出期限を昨年12月の、最終の講義時としていました。冬休みに読んで、フィードバックするためです。

昨年度は、タイトルのない文章が2、3ありました。筆者の課したトピック「夏目漱石『坊っちゃん』について」という、サブタイトルだけです。

オリジナルなタイトル、テーマがありませんでした。

本年度、受講生はほとんど皆、自分自身のテーマ(自分がぜひ言いたいこと)1つを、うまく探し出せたようです。つまり(少なくとも形の上では)、オリジナルなタイトルをつけ、テーマとトピックを分けて記述してありましたから。

実際、提出された作品はほとんどが、コンパクトにまとまっていて、着眼点も良いし、文章も上手です。筆者が学生の頃、こんな風にうまく書けたかどうか、怪しいものです。中には、自身の表現力を評価して、<いまの実力なら、こんなものか>で書き下ろした、戦略的な作品もありました。

受講生の感想文は、バラエティに富んでいます。同じ作品を読んでも、それぞれ思うことはこんなにも違うのか、と驚くほどに。もちろん才能の有無とか、作品の優劣はあるでしょう。ただ、そうした点は本科目の評価に限れば、問題にはなりません。タイトルとサブタイトルが記され、文責の主である著者の名前があれば、作品として一応完成です。

問題は、世間に向けて<発信する>という視点から見た、完成度の違いです。公表する場合、大小様々な制約や面倒な障害があり、それをクリアできているかどうか、が問題になります。

以下、一般的な読者、あるいは編集者に向けて<発信する>という視点から、気づいたことに触れておきたいと思います。

- 1) 文章はまとまっているのに、タイトルがオリジナルすぎて、(タイトルが)記述されたテーマを的確に表していない、タイトルとテーマがずれている作品もありました。
- 2) 筆者の課題、トピック(お題)を、すっか

り忘れていたものもあります。記述内容が、途中からトピックとずれているのです。

- 3) 手書きの場合、読みやすいように清書し、また、提出前に誤字脱字をチェックしておく心構えが必要です。清書したものを、さらにワープロ入力すると、気分も変わり別の視点から、自分の作品を見直すこともできます。
- 4) 漢字・カタカナ・ひらがなの配分にも意識を向けて、独自の言語感覚を発揮してほしいと思います。
- 5) 創作の制約の1つ、字数制限に無頓着な人も何人かいます。
- 6) 改行されていない、1作品1パラグラフのものも2点ありました。文章を、パラグラフを重ねて展開していません。文芸作業で、パラグラフ分けの練習は十分にしたはずなのですが。？なぞ、です。感想文をもう一度読み直し、謎解きをしてみたいと思います。

(提出物の中に、夏目漱石『こころ』についての感想文が1点、混じっています。トピックは、「深沢七郎『檜山節考』を読んで」なのですが。？？？不可解、です。)

4. 読書感想文—なぞ解き

先に触れた改行のない感想文2点、気になります。

もう一度読み直してみることに。読むのは、3回目です。2点とも女子学生の作品で、1作品1パラグラフ。タイトルは「歌のもつ意味」と「檜山節考は悲しい話か?」。いずれも、内容のある

優れた感想文です。それだけに何故、改行しないのか、理由を知りたいのです。

二人とも、きちんと出席していると思います。毎回の、文芸作業課題を提出していますから。講義内容とパラグラフ分け作業の趣旨を、理解していないのでしょうか？あるいは自分の文章のスタイルを、頑固に変えるつもりがないのかも知れません。

パラグラフを分けるのは、一つは読者に余計な負荷負担をかけないためです。できるだけ読みやすく、分かりやすくして、ずっと頭に入る、理解してもらえる文章を書く。作者が自身の思いを、他者に受け入れてもらいたいからです。感想文の作者は、読者の存在を意識していない？読者に向かって発信する気持ちがない？

「檜山節考は悲しい話か?」は、改行がないばかりか、指定した制限字数を大幅に超えています。そのため読むのに、さらに大きな負担がかかります。

パラグラフ分けのもう一つの理由は、自分の思いを効率よく展開し、叙述内容に説得力をもたせるためです。編集作業としての〈分ける〉は、分析的思考を働かせることです。文字言語は〈はなしことば〉と違い、整理された、コンパクトな叙述に向かいます。叙述のエコノミー(節用)のためです。英語では、“coherence”という語がそれに当たるでしょうか。文体のまとまり、パラグラフ間の緊密な結合のことです。

テーマと無関係なことは、削ります。その趣旨で筆者は、〈削約〉と名づけて、作家のエッセイを削って約(つづ)める文芸作業もしています。

談話や講演などを活字にする場合は、事情は異なります。〈はなしことば〉の雰囲気を出すために、削らずに残す工夫がされています。作家・夏

目漱石の講演など、たとえ話が多くて脇道にそれ、ひたすらテーマを追うものではありません。たびたび脱線し、その脱線が魅力的です。だから「脱線」を残します。そのおかげで、講演集『私の個人主義』を読むと、漱石の声や息づかい、間の取り方、熱気のある会場の雰囲気まで感じられます。(話が、ちょっと脱線したようですから、本題に入ります。)

では、改行なしの感想文2点について、改行なしの〈なぜ〉を解いてみます。まずは「歌のもつ意味」から。

エッセイは、「この物語で印象的なのは、話中に何度も登場する歌である」という文から始まります。テーマは「歌のもつ意味」1つにしぼられ、エッセイ全体がよくまとまっています。講義や文芸作業の趣旨が理解された、と筆者は満足感を覚えました。しかし単に、元々こんな風に見える人だった、のかも知れません。

論の展開も、上手です。物語の場面展開に沿うようにして、論述を進めていきます。そこで筆者は、勝手にパラグラフ分けをしてみました。ワープロ入力したA4の用紙に、分ける印を入れてみます。〈お、なんだ、もっと分かりやすくなったじゃないか!〉と、すっきりした気分になりました。

終わりのパラグラフ2つは、結論部分です。2つに分けると、先のパラグラフを後のそれが、主張を強めながら繰り返すことになります。しかも先のパラグラフは修辞疑問で終わり、後のパラグラフがその問いに答える形になるのです。「村の中では歌が重要な情報伝達の方法であり、共通の記憶であった」という作者の主張(結論)が、より一層明瞭になるとおもいますが。

「歌のもつ意味」は、コンパクトな優れた感想文です。なぜ、改行しなかったのでしょうか? ポリシー? 作者のスタイル? 年明け最初の講義時に、尋ねてみようと思います。

5. 読書感想文—なぜ解き(つづき)

「檜山節考は悲しい話か?」改行なしの、なぜを解きます。

難題、です。

ワープロ入力の表紙1枚と、本文はA4用紙2枚。1枚目、改行なしで、文字がびっしり詰まっています。36行×40字=1,440字。2枚目、20行×40字=800字。2枚合わせて2,240字で、指定した制限字数のほぼ倍はあります。

改行もなく文字と文が紙面を埋めつくしている、だけではありません。文もこなれていないし、上手とは言えません。頭に浮かぶ粗削りな想念が、未整理のまま、これでもかこれでもか、と連なってゆきます。

全56行の内、なぜか終わりの3行だけ、別のパラグラフになっています。それまでの53行は改行なし。ほんの一部とはいえ、改行はしているのですから、改行を意識していない、わけでもありません。

作者にとって終わりの3行は、〈付記〉のような意味合いがあるのでしょうか。こんなふうに記されています。

読書感想文を書くにあたって、自分の感情だけでなく登場人物や当時の時代背景、現代との比較などを通して、今までとは全く別の感想を抱いた

自分に驚いた。また文学の面白さや奥深さに気付いた。これをきっかけに積極的に昔の文学に触れていきたいと感じた。

下線部は、筆者のものです。課題の短編小説を何度も繰り返し読み、考えに考えてテンションを上げながら書いた、作者に訪れた予期しない幸福な瞬間。ものを書き考える人なら、羨ますにはいられない貴重な体験です。

冒頭に、こんな記述があります。「読書感想文を書くにあたって、数回読み返した。(略) どうしてもとらえようのない曖昧なものがあって、なんとかそれを文字にしたかったからである」(下線部は筆者)。それほどまでに表現したいという、真剣な気持ちになれるのは凄いことです。真摯な欲求がなくては、ものは書けませんから。

「檜山節考は悲しい話か？」を、どのように位置づければ良いのでしょうか？

作者は＜分けのわからない何ものか＞を表現したいのであって、やはり、テーマを1つ探し出して論証する試みではありません。読者に向けて発信したものというより、衝撃的な作品に触れ格闘した体験記、不可解な何ものかと正面から向き合い・考え・覚醒に至る記録、と呼べるかも知れません。姥捨山の話を中心に「ひどい話」だと感じる自身の読み方から、繰り返し読み直し熟考することで、より深い理解、意識の覚醒へ至る過程を、エネルギーに書き綴った記録と思えます。

試しに、パラグラフ分けをしてみました。改行するなら、この辺りだろうと目星を付けて。改行は可能です。しかしこの作品に関する限り、パラグラフ分けに今の時点では、あまり意味がないような気がしています。53行は論の展開ではなく、連続する思索のうねり、1つの白熱した塊のよう

なものですから。

感想文を書いた時点では、作者には改行とか“coherence”の意識もなく、その時点で指摘しても、おそらくパラグラフ分けなどできなかったでしょう。そう考えると、改行された終わりの3行は、たとえ独立したパラグラフの＜付記＞として読めても、仮に作者自身が意識の表層で＜付記＞のつもりで改行していたとしても、深層では単なる付記ではなく、思索のうねりの到着点として、表記上の改行によっては前の53行と後の3行は断絶もせず、作者の中で連続しているように思われます。

課題エッセイ「檜山節考は悲しい話か？」を読んで、筆者は作者の真剣な取り組みと、溢れ出るエネルギーに圧倒されました。

おわりにー〈聞き書き〉のこと

読書感想文の課題、深沢七郎の短編小説『檜山節考』(1956)は、＜聞き書き＞をもとに創作した作品です。作者によれば、はなし(話)は山梨県の山村の年寄りから聞いたもので、作中のことば(方言)は甲州弁とのこと。発表当時、高度成長期に入ったばかりの日本で、多くの作家や評論家、文化人に多大な衝撃を与えたようです。

本科目の受講生にも、『檜山節考』は60余年の歳月を経て、大きな衝撃を与えたに違いありません。閉ざされた名もない山村での「悲惨な」生活、生と死に、一人で向き合うのですから。作品には、自分たちとは全く異質な土俗的、非近代的な世界観が描かれています。

先にも触れた感想文には、「不気味な雰囲気、漂う世界観」とありました。あるいは「反近代の歌物語」結末には、「私たちがこの小説に衝撃を

覚えるとすれば、昔の人がこれを読めば、普通のことに見えるかもしれない、この明るさを伴う「ヒリズム」と、記されていました。

文芸創作論の後半、メインテーマは〈聞き書き〉です。講義内容に、少し触れておきたいと思います。

〈聞き書き〉は、ふつうの人々の声(はなしことばの生活文化)を聞いて、文字で書き記す行為です。近代日本語(本科目前半のメインテーマ)は、急激な近代化の潮流から外れた声を記録するものではありません。近代化の世界観からすれば、「よほどのモノ好き」でない限り、そんな声を聞きたいとは思わないのでしょうか。『遠野物語』(1910)の柳田國男、『檜山節考』(1956)の深沢七郎、『忘れられた日本人』(1960)の宮本常一、『苦海浄土 わが水俣病』(1969)の石牟礼道子などは、よほどのモノ好きだったとも言えるかも知れません。

また聞き書きするためには、良き語り手にめぐり合う必要もあります。はなし(話)を聞きたいと思っても、ふつうの人々は、ものを語らない(まとまった話をしない)からです。柳田は、遠野の人・佐々木喜善から聞き書きしました。宮本は例えば、田中梅治や高木誠一といった土地の人を訪ねています。いずれも、文字を知る、良き語り手(伝承者)です。深沢や石牟礼も、良き語り手と出会ったのだと思います。

以上は、本科目後半〈聞き書き〉の回で取り上げた、人と作品です。文芸の聞き書きとは違い、はなしことばを文字にすると言っても、目的や方法の異なる書きものも多々あります。典型的なやり方は、ノートに克明に記述するとか、ボイスレコーダーや速記術を用いて忠実に記録し、はなし

(話)をそのまま文字にします。

聞き書きをもとに創作された文芸作品は、実際のはなしことばそのままの、忠実な記録ではありません。ことばの忠実な記録が目的でないとしたら、人の〈はなし〉を聞く書き手は、何を聞き、何を書くのでしょうか。『苦海浄土 わが水俣病』を書いた石牟礼道子は、渡辺京二に、「だって、あの人(語り手)が心の中で言っていることを文字にすると、ああなるんだもの」と言ったそうです。心の声を聞く、など普通の人ができることはありません。極めて特殊な能力なのでしょう。

では、文芸創作の聞き書きは、特殊な能力のある人にしかできないのでしょうか? もちろん、そんなことはありません。本科目では、色々な文芸作品を取り上げて、聞き書きの方法論について考察します。文芸作業を通じて、受講生にもそれぞれ考えてもらいます。

以下に参考のため、聞き書きの基本的な心構えについて、私なりに考えたことを記載しておきたいと思います。パワーポイントを使って、スクリーンに映し出したスライドです。聞き書きと言っても、〈聞く〉と〈書く〉は全く別の行為なので、別々のスライドにしてあります。

〈聞く〉

聞きたいと思うことだけを聞くのではなく、対象者の話(はなし)全部に素直な気持ちで・偏見を持たず・心底興味をもって・謙虚な態度で耳を傾ける。

謙虚になるためには、仮に十二分な事前調査をしていても、自分の知らない(unknown)世界について聞くのだ、という大前提が必要。

一方、対象者は自分がふつう(当たり前)だと思っている(known)ことを、それぞれ固有の「は

なしことば」で語る。その際、知らない世界を想起させる細部(details)を、脳裡に刻む。

対象者に共感し(共感覚を働かす)、対象者は何を語りたいのか真摯に考えながら聞く。

聞き手には、好奇心と共感が大切。

<書く>↪

忠実な記録を取るのが目的でないならば、語り手の話を全部書くことはできない。聞いた話の中で、自分は何に一番関心があるのかよく考えて、テーマを探し出す。

知らない世界を想起させる細部(details)を生かしながら、文章を構成する。

〔付記〕

年明け初の文芸創作論、講義後に読書感想文1点の提出がありました。(昨年末の)提出期限を過ぎています。きっと執筆が冬休みにずれ込んだのでしょう。「檜山節考を読んで」とあるだけで、筆者が求めた、作者自身のオリジナルなくタイトル>がありません。

医大医学科からの受講生が書いた感想文です。「将来医療従事者となる私」の立場で書かれた、優れた明晰な文章です。冒頭に、「人々は葛藤を抱えながらも、(姥捨てを)当然のこととして行っている」とあります。後半では、どのような仕組みで姥捨てが「当然のこととして」行われているのかを、論理的に考察しています。感想文は、「自分とは大きく違う価値観・死生観にふれ、心が大きく揺さぶられた」の一文で結ばれていました。

締切りを過ぎた感想文が、まだ出てきそうな気がしていると、やはり出てきました。年明け第2

週目、府立大の男子学生からです。

筆者は遅れた理由に、耳を傾けます。あまり説得力はありませんが、真剣な面持ちで語る言い訳が良かったです。

「もし受け取って頂けるなら、大変ありがたいです」と、受講生。

「オッケーですよ」と、軽く筆者。

感想文のタイトルは、「因習」。姥捨てという非現代的な悪しき因習から生まれる、家族それぞれの心情について述べます。作者は、主人公・おりんの愛情深い息子(辰平)と、孫けさ吉を比べます。「親では無いにしても、祖母の死が待ち遠しい孫なんぞ、いてたまるものか」と、けさ吉への怒りあらわ! 若さいっぱい、熱い文章です。そんなけさ吉の薄情も、<因習>から生まれたのだという論旨です。叙述に、なかなか迫力がありました。

全体として、本年度は優れた印象的な読書感想文が多かったと思います。現代の若者にとっては、非常にショッキングな物語の選択が良かった、のかも知れません。提出されたどの文章にもそれぞれ、若さが溢れていて筆者は大満足です。

3つの課題エッセイの内、紀行文と身辺雑記は終講の1月末が提出期日です。締切りを守らない読書感想文がまだあるとしたら、おそらく紀行文と身辺雑記に紛れ込んでくることでしょう。それも含め、とても楽しみにしています。

(本年度もパワーポイント・スライドの作成&修正は、奥島デザイン工房・奥島肇さんのお世話になりました。記して感謝の意を表したいと思います。)

(4) 講義からゼミナールへ、変容の試み

(科目名: 科学と思想 (リベラルアーツ・ゼミナール))

京都工芸繊維大学 非常勤講師

林 哲介

(授業の構想)

共同化教養教育が始まるにあたってどのような授業がふさわしいかを考えていたとき、「教養とは、自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のためになにができるかを知っている状態、あるいはそれを知ろうと努力している状態である。」という阿部謹也(1)の言葉を思い出しました。そこで、自身は理系の人間で長い間基礎教育ばかりやってきた者ですが、ここで担当する授業ではこの課題に正面から向きあってみようと思い、科目のひとつを「科学と思想」にしました。授業では西欧史における諸思想を題材にして学生と議論することにしようと考えました。すなわち「学問・科学と思想」が社会とどのように関わり、どのように進展して現代に至っているかを追う中に、現代に生きる立ち位置を見出す材料がある、そのためにはやはり古代以来の西欧の学術・思想の変遷を軸にして検討していく必要があると、このようなつもりでシラバスを作りました。「受講案内」の「学生へのメッセージ」には、「学問・思想の歴史を概観すると現代社会の到達点と課題の理解が深まり、そして自己のアイデンティティ(思想)の形成につながります。」と書きました。歴史も哲学も専門でない者がこのような授業をしていいのかという危惧もありましたが、理系の感覚をもとにしながら、学生たちに素材を提供して議論するのは、教養教育の授業として許されるだろうと考えて始めました。

しかしながら、最初から「リベラルアーツ・ゼミナール」にするには躊躇がありました。入学までに世界史を学習していない学生たちも結構多く、また目的に適した適当なまとまりのあるテキストも見当たらない。議論の前提となる共通の基礎的

知識・理解を欠いては密度のある議論ができるか不安でした。そこでまずは一般講義科目としてスタートし、どのようにゼミナールに発展させることができるか、こちらも学習していくことにしました。

(授業の方法)

とはいうものの、毎回の授業をこちらからの一方的な講義だけで進めるのでは学生が眠くなってしまふのが目に見える。そのため表のようなプログラム・課題を作って初回の授業で示し、それぞれの課題についてレポート報告をする希望者を募りました。各回の授業のはじめに担当してくれる学生に30分程度の発表をしてもらい、その後にこちらから補足説明をし、現代とつながる問題意識などをあげて意見交換することにした。課題ごとに2名以上で担当してくれるよう期待して希望者を求めましたが、ほぼ期待通り全ての課題について手が挙がりました。ただどれも2人組で担当してくれるわけにはいかず、単独の場合もありました。特に離れた2大学の学生が組になるのは難しいようでした。担当する学生には、それぞれの課題について、専門家の論説や教科書の当該部分などの資料を参考文献として渡し、これらをもとにパワーポイントで報告してもらいました。担当した学生たちの報告はどれも十分に期待に応えるものでした。

課題表

課題 1. ギリシャ哲学 ①「学問のはじまり」

・ギリシャ哲学の2つの潮流とはどんなものであったか。どうしてこれらが生まれたか。

課題 2. ギリシャ哲学 ②「ソクラテスの正義」

- ・ アテネ・デモクラシーとはどんなものであったか。
- ・ ソクラテスが生きたのはどんな時代だったか。
- ・ ソクラテス(プラトン前期)の倫理思想をどう考えるか。

課題 3. ギリシャ哲学 ③「プラトン、アリストテレス」

- ・ プラトン、アリストテレスの哲学の基本的な性格
- ・ その限界はなにか。

課題 4. ヨーロッパ中世とキリスト教

- ・ 古代から中世、どんな社会変化の時代であったか。
- ・ キリスト教はどうして強大になったのか。

課題 5. 中世からルネサンスへ

- ・ 中世後期からの社会変動の特徴はなにか。
- ・ 西欧の学問と大学はどのようにして生まれたか。

課題 6. イタリア・ルネサンスと社会変動

- ・ 15世紀ルネサンス・宗教改革期の社会変動の性格
- ・ 人文主義とはどんな運動か。

課題 7. 近代科学の誕生

- ・ 近代科学誕生における二つの要因とはなにか。
- ・ ガリレイの革新性とはなにか。

課題 8. 近代科学の思想への影響

- ・ F・ベーコンとR・デカルトの貢献はなにか。
- ・ ニュートン・近代科学の社会的影響

課題 9. 啓蒙思想

- ・ ヨーロッパ啓蒙思想とはなにか。
- ・ 啓蒙思想の歴史的背景はなにか。
- ・ 啓蒙思想の社会的影響と限界はどうであったか。

課題 10. 「自由」の思想の変遷

- ・ 自由主義経済思想の誕生。
- ・ 「功利主義」とはどんなものか。
- ・ 現代のリベラリズム、新自由主義を考える。

課題 11. 「自由」と「民主主義」の思想

- ・ 「自由」と「民主主義」は完成しているか。

- ・ 目指すべき「自由」、「民主主義」とはなにか。

課題 12. 「日本の近代化」

- ・ 日本の近代化の特徴は何か、西欧と比較する。
- ・ 日本人にとっての「世間」という社会

課題 13. 「現代とはどんな時代か」

- ・ 歴史における「危機」、現代の「危機」とはなにか。
- ・ 未来の社会に向かって、科学と科学者の役割



(リベラルアーツ・ゼミナールへ)

この3年間の授業では、概ね学生たちの受けとめ方には手ごたえがありました。しかし、一般講義として開講したためあって、年度によって履修者数が大きく変わり、50名を越えるような場合はレポートを分担する学生も限られ、発言する学生も一部になってしまう。また、専ら受動的に“講義を聴く”という意識で来ている学生たちもいて、結果としてこちらから講義調で話すことが多くなってしまったり、期待通りにいかないところがありました。そこで4年目になる今年度からこの科目を「リベラルアーツ・ゼミナール」に切り替えることにしました。この結果、履修者数が限られ(29年度は16名)、ほぼ全員でレポートを分担することができ、またゼミナールへの参加を意識した積極性が議論に現れました。

しかしながら、ゼミナールの在り方を考えるとまだ不十分な点が痛感されました。分担したテーマについて、担当した学生はその部分についてよく理解し考えているが、他のメンバーにとっては毎回その場ではじめて課題に接し聴く(予習ゼロ)ということになり、なかなか議論が深まらない。そのためにこちらからの解説と問題提起が多くなってしまったり。“教員が教えたくなくなってしまう”習性との格闘です。これは、基礎的な知識・理解(講

義的な内容)を共有することとディスカッションを組み合わせることの難しさで、この科目に限らずいろいろな分野の科目でゼミナールをやっていく上で共通の課題のように思われます。この点でまだこのゼミナールは完成していない。そこで次年度は少し方針を変更して試みるつもりです。各テーマの基礎的な知識・情報と検討課題をあらかじめ資料を含めて提供し、次回までに全員が予習し考えたうえで授業に臨むことができるように、プログラムと進め方を改善しようと思います。

シラバスにはこの科目の「学習目標」として

- ① 西欧における学問・科学の誕生と発展が哲学・思想や経済・社会の動向と密接に関連していることを理解し、説明することができる。
- ② 西欧近代思想の巨大性とこれを現代から見たときの問題を検討し、相対化の視点をもつ。
- ③ 日本の近代化と日本人の意識を比較分析し、現代社会の課題を論じる視座をもつ。

の3点を挙げました。前年度までの学生の期末レポートにあった感想の幾つかを紹介しておきます。

● 私はこの授業の中で、多くの新たな視点と知識を得た。特に人類が歩んできた歴史は自分が思っていた以上に密接に、直接的に現代の社会に結びついているということがわかった。これはよく言われることだが、今起きている問題に取り組むためには過去に起きた出来事を知らなければならない、という言葉の意味を実際に体感して理解できたように思う。ギリシャ哲学から始まり現代に至るまでの大まかな流れを掴むと、やはり日本の近代化が表面的で、技術の面に偏っていると感じざるを得なかった。西洋においてはこの授業名の通り科学と思想が絡み合いながら発展してきたために強くそこに根付いている感があるが、明治維新後急速に西洋の文明を取り入れて

きた日本においては、どうしても思想の面と科学技術の面の間にずれがあり、押すと崩れてしまうような脆さを感じた。現代は非常に複雑で多くの問題を抱える時代であるが、先を見つめる視点を忘れずに社会に関わっていかうと思う。(工織大・デザイン建築学課程)

● 歴史の流れを通して、かつての人々の思想やその背景を知ることで、私が普段意識しない物事について改めて考えるきっかけになった。普段なんとなしに見ているテレビや新聞の内容にも、興味を惹かれるようになり、この科目を受けることができてよかったと心から思う。

(工織大・電子システム工学課程)

● この授業は様々な思想について、唐突に紹介されることがなく必然的にその思想が生まれた背景と脈絡づけられていたのでとても理解が早くいったように感じている。有機的な知識体系が築けて、現代の様々な問題を見つけることができるようになったと思う。学生同士が話し合う時間も普段は知ることのないほかの人の考えを知ることができて新鮮だった。(工織大・デザイン建築学課程)

● 私はこの授業を受けて、自分の考え方が更新されていくのを実感することができた。歴史をみると、古代から思想家や哲学者、科学者らがどのような社会を目指すべきかを示してきた。にもかかわらず、何百年たっても全然変わっていないように感じる。長い間変わらなかったことを、果たして私たちが変えることができるのか不安だ。しかし、確実に言えるのは、この授業を受けて私は初めて危機感を抱くことができて良かったということだ。多くの人たちにこのような機会があればよいと思う。

(府立大・公共政策学科)

(1) 阿部謹也著『「教養」とはなにか』講談社

(5) 「京都銀行との“協働”講義と学生の学び」

(科目名：京都の経済)

京都府立大学 准教授

川勝 健志

「京都の経済」は、京都経済の現状と課題を認識したうえで、京都の大学に通う学生にとって身近な京都銀行を事例に、地域金融機関が持続可能な地域発展に果たしている役割について学ぶことを目標としている。

本講義の目玉は、何と言っても2016年7月に包括連携・協力協定を締結した京都銀行から毎回講師をお招きし、京都の経済に関わる幅広いテーマと同行の様々な取組みについて話を聞けることにある。京都の経済を熟知し、地域金融業界の最前線で躍進する京都銀行といわば協働で行う講義は座学であってもリアリティがあり、刺激に富む。実際、後述するように、本講義は学生にとってはもちろん、筆者にとっても貴重な機会となった。

本稿では、この講義が三大学教養教育共同化科目にふさわしいものになるために、京都銀行の協力のもとで、いかなる工夫を試みたのか、またその結果、学生の反応や学びはどのようなものであったかを紹介する。

1. 講義の進め方

この講義は、京都銀行からお越し頂く講師がほぼ毎回異なるリレー形式で行われることから、できる限り講義内容の連続性を確保すること、学生と各回の講師が双方向にコミュニケーションできる機会をつくることを重視し、講義時間を毎回3つの段階に分けて進めた。第1段階は、コーディネーター役の筆者による前回講義の簡単な振り返りとその日の講義テーマ及び講師の紹介である。各回の講師には、講義の冒頭に前回、学生が提出したコミュニケーションペーパー（以下、CP）の中で共通して多かった、あるいは特に共有すべ

き質問をいくつか取り上げ、回答してもらうとともに、その日のテーマとの関連性について説明をお願いした。

第2段階は、ゲスト講師による各回のテーマに沿った講義である。各回の講義テーマ・内容は、表1の通りであった。

表1 講義テーマ・内容

1、ガイダンス
2、京都経済の成長と京都銀行の変遷（前編）
3、京都経済の成長と京都銀行の変遷（後編）
4、地域経済と京都銀行の経営戦略
5、地元企業からみた京都経済
6、地方公共団体との連携と地域金融機関の使命
7、地方創生に向けた地域金融機関の取組
8、RESASからみる京都市の人口動態と地域経済循環
9、京都観光の現状と地域金融機関の取組
10、京都銀行におけるベンチャー企業支援の取組
11、京都銀行のM&A支援の取組について
12、6次産業化支援の取組について
13、海外展開支援への取組
14、地域経済の発展に向けて～経済界が求めている人材について～
15、学生代表者によるレポート課題発表&講評

第3段階は、直接の質疑応答である。筆者がその日の講義について若干の解説及びコメントをしたうえで、出席した学生から質問を募り、講師に回答してもらった。残念ながら自ら手を挙げて質問する学生はほとんどいなかったが、事前に各自CPに質問を書いて準備しておくように指示していたので、こちらから指名するとほぼすべての学生からすぐに質問があり、質疑応答の時間が滞るような場面はほとんどなかった。

2. 履修登録の状況

本講義の履修登録状況は、府大34名、工織大27名、医大6名の計67名となっている（表2を参照）。しかし、出席回数がゼロもしくは1回以下の授業放棄者を差し引いた実質的な受講者数は、府大22名（構成比は42.3%）、工織大25名（同48.1%）、医大5名（同9.6%）の計52名であった。とりわけ、府大の学生に授業放棄者

数が12名と多かったのは、そのうち9名が2回生以上であった（いわゆる“保険”として登録した）ためであると考えられる（ちなみに、工織大及び医大の履修登録者はすべて1回生）。結果として、実質受講者数については、理系の工織大が文系の多い府大（受講者の大半が公共政策学部）をわずかながら上回ったのは意外であった。

表2 履修登録者・授業放棄者・実質受講者の数

大学	履修登録者数	授業放棄者数	実質受講者数 () 内数値は構成比
府大	34	12	22 (42.3)
工織大	27	2	25 (48.1)
医大	6	1	5 (9.6)
合計	67	15	52 (100.0)

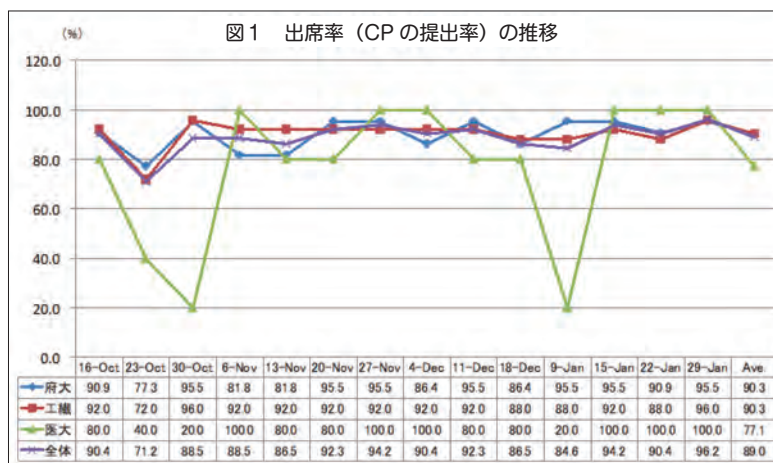
3. 出席状況とCPにみる学生の反応

出席状況については、どうであったであろうか。講義終了後、学生に毎回提出を求めているCPで出席状況を確認してみると、3大学全体の出席率は、ほぼすべての回で8割～9割となっており、各回の講義テーマ・内容に関係なく一貫して高かったことがわかる(図1を参照)。大学別で見ても、各大学とも出席率は高く、その平均値は府大と工

織大がともに90.3%、医大77.1%となっている。医大の平均出席率が他の2大学より10%以上低くなっているのは、実質受講者数が5名しかいないために、欠席者が重なった回に数値が大きく減少したからである。3大学とも出席率が高かったのは、CPの提出が事実上の出席点（成績評価で3割を配点）となっていることの影響は小さくないが、それ以上に受講した学生の本講義への関心の高さを表しているように思われる。

学生から回収したCPを見てみると、各回の講義で3大学の学生が共通して下記のような感想を述べており、この講義から学んだことへの興奮や驚きが見られたからである。

- ・銀行については、これまでATMでのお金の出し入れくらいしか関わりがなく、仕事としても個人や企業への融資くらいしか思い浮かばなかったが、実際にはその業務は多岐にわたり、とりわけ地方創生など地域の経済や社会を支える重要なインフラであることを知り、イメージとはかなり異なるものだった。
- ・京都経済が「2%経済」である（主要な経済指標で見た場合に全国の約2%を占める）という



ことや、京都の経済トレンドが想像していたよりも低迷していたということを知り、客観的なデータで現状を読み解くことの大切さと面白さを知った。

- ・大阪の企業の多くが東京に本社を移したのとは対照的に、京都の企業はほとんどが京都に根づいていることを初めて知った。またその理由として、大学が多く、産学協働や優秀な学生の確保がしやすいこと、京都のブランド力はグローバルな価値があり、京都の企業は早くから東京ではなく、世界を見ているということに感銘を受けた。
- ・かつてはまだベンチャーであった京都の企業を京都銀行が支援（投資）したことで、今では世界に誇る技術を生み出し、誰もが知る有力企業に成長したケースがいくつもあること、またそうした企業の株式の含み益が京都銀行の経営基盤を強固にし、バブル崩壊期にはいち早く不良債権の処理が可能になったことなどをお聞きし、地域金融機関が創業間もないベンチャー企業に投資することの意義を感じた。
- ・京都の産業は観光業などのイメージが強かったが、実際には伝統産業や先端産業が併存していること、元々京都の伝統産業は高付加価値でオンリーワンの「軽薄短小型」に属するものが多いこと、京都には、電子部品等で世界的なシェアを誇る技術力の高い中小企業もあることなどを聞いて驚いた。
- ・中小企業の M&A 支援は、後継者不足による黒字廃業や技術の根絶などの問題解決にもつながると聞いて、M&A に対するネガティブなイメージが変わった。
- ・ローカルなイメージの強い地方銀行が中小企業の海外進出や、逆に外国企業の日本進出を支援

する国際的な事業も行っているとは、まったく知らなかった。



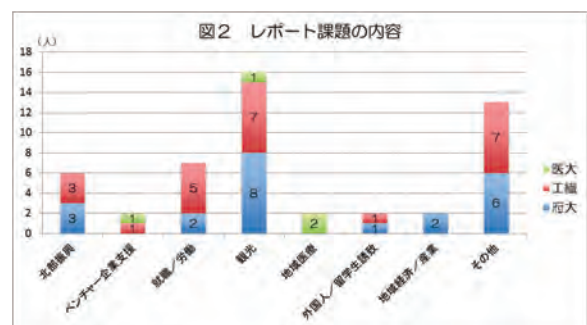
4、レポート試験にみる学生の提言

本講義での学びの最終的な成果については、レポート試験から一定程度は見出せる。

レポート試験は一般に学期末に行われることが多い。しかし、講義最終日は比較的優れたレポートを作成した学生が自らその内容をプレゼンし、京都銀行の講師陣から講評を受ける、いわば報告会とするために、レポートの課題を 12 月末に公表し、年明けの講義 2 回目をその提出期日とした。

レポート課題は、本講義の内容を踏まえることを前提としつつも、テーマを地域金融に限定することなく、比較的自由度の高いものにしたいという京都銀行側の意向も反映して、「京都から始める地域の未来」とした。

学生が選択したレポートのテーマは、その大半が地域の活性化や地方創生を目的としたものであったが、より具体的には、観光に関するものが最も多く、16 名（全体の 32%）が取り上げていた（図 2 を参照）。次いで多かったのが、就職／労働や北部振興に関するもので、それぞれ 7 名（同 14%）、6 名（同 12%）がテーマとして取り上



げていた。テーマの選択に3大学で大きな差異は見られなかったが、府大では政策志向的なものが、工織大ではRESAS(地域経済分析システム)を利用したものが、医大では医師の地域的偏在に着目したものが複数あり、レポート作成の動機や方法に各大学の特色も一定見られた。

そうした特色は、講義最終日の発表者として選ばれた学生6名(3大学から各2名)のレポートにも表れていたように思われる。下記は、それぞれのレポート概要である。

- ・就職時に域外流出者が多くなる京都を多様な人材の確保を可能にする先進モデルとして形成することを提言(府大)
- ・京都で発生している観光公害を観光振興と両立する形で解決する政策について提言(府大)
- ・人口減少がより深刻な自治体でこそベンチャー企業の起業を支援(誘致)し、雇用を確保することを提言(工織大)
- ・RESASで確認した京都府の客室稼働率等を踏まえ、規制緩和による客室数増加を推計(工織大)
- ・京都府北部地域の医師不足解消策として、観光資源を活用したパッケージツアーを提案(医大)
- ・地方創生に資する京都のベンチャー企業への支援・育成モデルを、地域金融機関等とも協力して全国に発信(医大)

京都で学ぶ3大学の学生が文系理系を問わず、京都の経済を支える企業や地域金融機関に関心を持ち、その魅力についてより詳しく知るきっかけとなることを期待したい。

5. まとめ

以上から、3大学の学生がそれぞれの問題関心から地域の未来を京都から考えるうえで、豊富かつ有用な素材を提供してくれる京都銀行と協働で行った講義の意義は小さくなかったといえよう。

(6) 京野菜を栽培する

(科目名：京野菜を栽培する)

京都府立大学 非常勤講師

間藤 徹

京都三大学教養教育共同化事業に対して、京都府立大学京都和食文化研究センターは本講義「京野菜を栽培する」を提供した。本講義は京都の文化の一つをなす「京料理」を支える野菜供給の実際を教養教育の一環として体験してもらうことを意図して、農家石割照久氏にご協力いただき、受講生には、土作り、苗作り、播種、栽培から出荷までを京都市南区の石割氏の圃場で体験させていただいた。併せて、ヒトの食を巡る物質の循環も地球の大きな物質循環の一部を構成しており、人間の不適切な経済活動（大量生産大量廃棄、食料の大量な輸出入、熱帯の大規模プランテーション、乾燥地での過度の灌漑農業など）が地球環境に大きく影響すること、各地の食文化はその地方からの食料供給によって形成され維持されていること、などを伝え、受講生がこれからの食生活、人生をどのように設計していくのかを考えるきっかけとなる講義にしたいと考えた。

本講義への履修登録者は、京都府立大学 18 名、京都工芸繊維大学 14 名、京都府立医大 4 名の 36 名で、公共政策学部、生命環境学部、工芸科学部、医学部の正規生から京都和食文化研究センターの科目等履修生までバラエティに富んでいた。開講日と内容は以下の通りであった。

8月5日 府立大学稲盛記念会館 201 講義室

「京都で栽培されたハクサイは京野菜か？」のタイトルで、京野菜とは、種子（その種だけの遺伝子）や京都の土壌・気候、京都の農家の特別の技術だけに依存するのではなく、京都の料理人や舌の肥えた顧客の要求を満たす野菜を生産しようとする農家の技術と心配りが、京都の野菜を「京野菜」たらしめている、と講義。

8月6日 石割家居間

江戸時代から続く石割家を拝見し、客間で石割

氏から京都府の定める京野菜 37 品目について、選ばれた経緯や料理の仕方、栽培の工夫・苦労などについて講義。有機栽培野菜の品質について多くの質問。予定していた屋外での農作業は酷暑のため中止。



写真1 鋤を使った畝の立て方を習う。



写真2 九条ネギ苗を引き抜いて、本圃に植える苗（干しネギ）を作る。



写真3 干しネギを石割氏直伝の方法で植え付ける。

8月26日、27日 石割氏圃場

肥料を撒き畑の一部を畝立て。初めて鍬を使う学生多し。トラクターによる畝立てを見学。ダイコン、カブを播種し、キャベツ、ブロッコリ、九条ネギの苗を苗圃場から抜き、これらを本圃場に植え付けるといふ農家ならではの作業を体験した。

10月1日 石割氏圃場

一ヶ月ぶりに圃場へ。中耕と土寄せ、追肥。カブ、ダイコンを間引き、雑草を抜いた。生育状況を見て肥料を追加した(追肥)。追肥は葉の緑色が薄くなってきたら与えるが、受講生は葉色が薄くなっているとは判断できず、プロの眼を実感する。間引き菜を持ち帰って料理した受講生もいた。

11月3日 石割氏圃場

待ちに待った収穫、しかし単に可食部を刈り取るのではない。市場に出す場合、料亭に納める場合には、どこまで下の葉／外の葉を落とす?、土はつけたまま／落とす?、鮮度を保つ包装? など作物毎に注意点を伺いながら、大きく成長した野菜を鎌を使って収穫していく。



写真4 収穫を前に石割氏から鎌の使い方を学ぶ。

皆、持ちきれないほど収穫。

12月23日 石割氏圃場

最後の収穫。石割氏のご好意で、本講義で栽培してこなかった金時人参や聖護院大根もいただいた。



写真5 収穫した野菜の掃除の仕方を知る。

12月24日 府立大学稲盛記念会館 201 講義室

総括の講義。本講義は遠隔地の圃場での屋外作業が多く、しかも開講日の多くが休日や日曜日だったのにも拘らず、25名の受講生がほぼ皆勤だった。石割圃場で収穫した野菜を使っの料理がメールを通じて集約され最終講義で全員に披露された。



写真6 受講生の調理例。内容は以下の URL から。
<http://www.npk.kais.kyoto-u.ac.jp/content/files/match/ISHIWARIFUDAIRecipe2017.pdf>

(7) アナログ的観察からアナログ的思考・発想へ

(科目名：意外と知らない植物の世界)

京都府立大学 客員教授
松谷 茂

[はじめに]

大学に隣接して京都府立植物園はある。そこは、12,000 種類という世界の生きた植物を保存また、年間の入園者数は 80 万人を超えるなど、府民・国民に愛されるまさに「生きた植物の博物館」と呼ぶにふさわしい植物園。「植物園は単なる緑の空間ではなく本来、理科教育・学校教育実践の場として利活用すべきである」は、私の持論で「植物を理系的側面だけでなく、文系的側面からもアプローチし、多角的発想で植物を語ってみたい」とも常々思っていたことなどから四年前、三大学機構から講義の打診があったときには、これはビッグチャンスだと引き受けた。講義名を「意外と知らない植物の世界」とし、三大学・6 人の講師陣からなるリレー講義は、柱となる「植物」をいろいろな角度から理系的・文系的に論じる、まさに理系と文系が融合した形で実現した。

[アナログ的发想]

「最近の学生は…」、上の世代が若者に対してやや愚痴交じりに発するこのフレーズは、どの時代にも普遍的なものなのであろう。京都府立植物園退職後、京都府立大学にお世話になってこの間、学生たちと接してきた経験から感じている最大の関心事は「結果・結論を早く出しすぎではないか」。なぜなのかと理由をいろいろ考えたところ、最近のデジタル事情にあるのでは、と思うに至った。

雑談の中でいろいろ質問をすると、すぐに答えが、結論が返ってくる。彼らの行動を観察して気になることは、片手にスマホを持ってなにやら操作をしている動作だ、もちろん全員ではないが。懸念は、回答の根拠が自身の頭ではなく、スマホ

画面にあること。時間をかけて考える過程を経ることなく、何の苦労もなく瞬時に答えが引き出せる、そのことで自分は理解したと満足していることに、危惧を感じざるを得ない。

この講義の対象学年はほぼ一回生。受験勉強に明け暮れた何年間かは、知識偏重一辺倒であつたろう。「生物」で受験しなかった学生たちにとって、身近に存在する「植物」は単なる木か草か、はたまた雑木か雑草であつたかもしれない。

全 15 回の講義のうち、植物園での実習講義を温室の中も含め 5 回とした。木や草の名前を覚えることが目的ではない。植物の有する不思議や謎、意外な形態などを、自らの感性を十分に駆使して感じ取ることが大事であると思っているので、じかに触れあう体験をさせる。葉を触ったときの感触や葉を揉み細胞をつぶすときに発生する匂い、例えば同じクスノキ科の樹木でも種によってわずかに異なる香りを感じさせる。種子の風散布戦略としてヒマラヤスギ、ニワウルシ、ユリノキ、アルソミトラ・マクロカルパなどを実際に高く放り投げ、落下する様子の観察また、動物散布では、コセンダングサ、オオオナモミの果実を自分の服に付けてみて、その実態を感じさせる。枝の樹皮を削り、材をかじらせ、学生の反応を見るその材料はニガキ、キハダ、オオバメガ。かじって数秒後に襲ってくる苦味に学生はみな顔をしかめるが、この経験は生涯忘れないだろう。苦味は胃薬となるベルベリンなどの薬効成分なのだが、府立医大の学生たちは、将来ほとんどが医者になるだろうし、薬の元となる成分を含有しているホンマモンの植物を実際に知ることは非常に大事である。『良薬口に苦し』を感じさせる！

[アナログ的思考・発想]

アルソミトラ・マクロカルパの果実が空中を飛ぶ姿を見て、グライダーが考え出された。オオオナモミの果実が動物の毛に絡まりつく様子から、マジックテープが考案された。

「三つ葉葵」、「五三桐」、「上諏訪梶の葉」などの家紋は、植物のある器官がデザイン化された。

平安の王朝人は、高貴な色・紫色を染めるのに、ムラサキの根を染料に、媒染材としてツバキの生木を燃やした灰を使って染め上げた。

古来日本人の好んだツバキは 18 世紀ヨーロッパに紹介されるや、19 世紀に『椿姫』の小説やオペラで流行した。

デジタルの世界からは考えられない感性の感覚は、アナログ的観察の世界には無限に存在する。そこから湧き出る思考・発想は、人間生活に好影響を及ぼすいろいろな場面に過去展開してきたし、それは今後も続くであろう。押し付けるわけではないが、特にこの講義を受けた学生たちからの発想を楽しみたいし、若い力の将来の思考に期待したい。

生活の中で植物とのかかわりの意義を一つでも見出してくれば、と思っている。

[植物園に対する認識の変化]

これは、講義の前後で植物園に対する認識が変化したかを問う、私が課した学生へのレポート課題だが、ほとんどの学生は「大きく認識が変わった」と報告している。ほんまもんの植物園は、単なる緑空間また、公園でも庭園でもない。全 15 回の講義を受けた学生は、植物園の本質をはじめて知ることとなったと思うし、今まで身近に感じていた植物に対しても、いろいろな角度から接する方法を自ら探究し、これからの学生生活、社会